
付添人

松元千春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

付添人

【Nコード】

N34660

【作者名】

松元千春

【あらすじ】

千春は死ぬ間際の祖父の付添人として、10個の珠を持ち過去へと飛ぶ。

珠は死にゆく人たちの間で渡されるリレーなのだ。

『おじいちゃん…こんなこと知りたくなかった』

『全部知ってほしいんだ。』

『教えてくれてありがとう』

大切な人に伝えたい！

いざ！青春をもう一度！

1 不吉な知らせ（前書き）

この物語はフィクションです。

1 不吉な知らせ

二十二歳の梅雨だった。毎日しとしと降る雨に鬱陶しさを感じながらも、その年の春に大学を卒業したばかりの千春は、希望の出版社に入社し充実した毎日を過ごしていた。研修や会議をただこなすだけで精一杯なのに、時間は慌ただしく過ぎていく。そこにしみついていくだけで、いっぱしの社会人という責任を果たす大人になった気がしていた。大学の友達と会う機会も減り、しかしそれを悲しいとも不満にも思う暇もなかった。周りの人間は出版社に入っただけで一目置いてくれたし、それが多少の優越感も起こしていた気になっていたのだが、本人にはそれを気付というのが無理だった。鼻高々に、毎日ピシッとアイロンのかかったスーツに身を包んで会社へと足を運ぶ。とは言っても、他人に言えないこともあった。今やらせて貰える仕事など、数人の作家へ原稿催促とその収集、夜中までの原稿チェックしかないことだ。しかも、たとえその原稿にチェックを入れたとしても、後で先輩が確認をする。それは当たり前であり安心することのようで、どこか不満だった。それに、千春の希望していた部署はここではない。可愛いモデルの女の子たちに囲まれながら、出版業界でも有名なこの会社のナンバーであるワンティーン雑誌を手掛けることを希望した。その夢はもろくも崩れ去ったが、千春なりに毎日一生懸命だった。

「おーい！ 山下！」

大量の文字が並ぶ原稿に眼を光らせ、赤ペンでチェックを入れてみると、野太い声が後方から聞こえた。顔を上げて部屋の一番隅へ目を向けると、同期の高橋正明が電話の受話器を片手に千春に手を振っていた。もうとつくに帰社時間が過ぎているが、社内にはほとんどの人間が残っている。電話もひっきりなしに鳴り続けるため、静かなオフィスという雰囲気にはほど遠い。電話があれば大声で叫ぶのは日常的にはなっているのだが、この時ばかりは彼の声は焦り

も含んでいた。

「電話だぞ！ お前のお母さんみたいだけど、すげえ焦っている！」
そんな事を言うので、普段一つの電話になど知らん振りを決め込む周りの人達までもが

何かあったのかとちらほらと顔を上げた。恥ずかしさにチツと舌打ちを漏らしそうになるのをぐっと堪え、あとで文句を言つてやろ」と心の中で思った。高橋正明は千春の同期であり、恋人でもある男だ。入社して一ヶ月で付き合い始めた二人は、まだ二ヶ月という短い仲だが、彼は顔に似合わず優しくかった。顔はゴリラ、中身は芸人のようなところも、いつの間にか好きになった。見た目は決してタイプではないのに不思議なものだ。正明は、一途にこの会社の雑誌に惚れ込み、履歴書選考で落ちたにもかかわらず毎日人事部に通い座り込みをしたらしい。そんなことをした就職活動生など、一昔前の話のようだ。人事部に買われて入社出来たからいいものの、一歩間違えば御用も免れない。今では社内でも有名な伝説である。

「ありがと」

社内で交際は秘密のために一言だけそう返し、千春は自分の机に設置されている受話器をとった。保留中を表す点滅中のボタンを素早く押す。それと同時に、会社で電話などかけてくる親に対しても腹が立った。左手に持った受話器を耳に当て、右手は携帯を求めて鞆の中を漁った。

「お電話代わりました。山下です」

もう私用の電話だと周囲に分かってしまっているが、それでも一線を引いてお客に出るようにかしこまった。悪いことをしていないのに、どこか責められている気がしてしまう。

自分の反応で、少しでも親が傷つけばいいのに、とさえ思ってしまう。しかし、電話の相手はそんなことなどどうでもいいかのうように、声を張り上げてきた。

「あっ！ 千春？ お母さんだけどー！」

母、千恵子の切羽詰まった声の大きさに、思わず受話器から耳を

離す。電話を初めてかけた子供のようなそれに、千春はしかめっ面をしながら首を小さく傾げた。そしてやっと見つけた携帯の画面を開いてみて、その着信履歴に啞然とした。この数時間にすべて母親の名前で埋まっているのだ。何かあったことは一目瞭然だ。心臓が一気に脈打った。受話器を持つ手が震え、それを再び耳に当てた時には母親は叫び続けていた。しかし、すぐに千春を何度もちらちらと見る先輩の顔が視界に入った。入社数十年の園子だ。もう何分話しただろう。あとで嫌みを言われるのはまっぴらご免だった。

「お母さん。なに。今仕事だし、会社にかけてこないでよ。後で携帯にかけて」

今すぐ事情を説明してほしい。しかし、この電話はまずい。必死で電話を切ろうとすると、今度は母親の涙声が耳に響いた。

「お母さん何度もかけたけど、繋がらないんだもの！ もう夜よ！ 一人暮らしの女の子が働く時間じゃないのよ！ それにどれだけお母さんが早く伝えたかったと思っっているの！ あんたは就職で家を出てから一回も帰らない、電話も出ない！ 何をやっているのよ！」

なんだ、説教か。何かあったのかと心配していた気持ちが冷えていく。一気に面倒くさくなり、このまま受話器を置いてしまおうかと耳から離しかけた時だった。想像もしていなかった言葉が脳天に響いたのだ。

「おじいちゃんが危篤よ……」

頭が真っ白になるとはこういうことを言うのだと漠然と思った。言葉を口から出そうと思えば思うほど、その神経が麻痺してしまっただかのように動かない。声を誰かに盗まれたようだった。目の前にある机の蛍光灯だけが、ただ気味悪く光り、千春の真っ青な顔を照らした。もう、誰も千春を見てはいなかった。たった一人だけ、心配そうに正明が奥の机から千春を見つめていた。その後、千春は母親の電話をどうやって切ったか全く覚えていなかった。もしかしたら、あのまま何も言わず受話器を置いたのかもしれない。病気が事

故か。危篤ってなんだ。生きるのか死ぬのか。様々な疑問が頭を駆け巡り、もう一度電話をかけ直そうと思ったその時、千春は左肩を軽く掴まれた。見上げると、そこには見知った顔。顔を上げたと同時に、無意識に左目から涙が零れた。縋り付きたくない手を伸ばす。

「まーくん……」

「シッ！」

思わず呼び慣れたあだ名で目の前にいる恋人を呼びかけ、その手も制止された。正明が周囲に目を走らせたが、仕事に夢中で誰も聞いてなかったようだ。だが、千春に異変を感じた正明が耳元で囁く。

「ちよいと来いよ」

いつになく真面目に言うと、正明はもう歩き出していた。千春は鞆から取り出した携帯を持ち、正明が廊下に向かって歩く背中を追った。廊下には、誰もいなかった。みんながオフィスの中にいるので却って廊下は静かすぎるくらいだ。電気も最小限にまで消されてほの暗い。まるで異空間に來たようで、いつも通っている場所なのに緊張する。今置かれていた状況とは対照的なはずなのに、千春は後ろから正明に抱きつきたくなった。同じ気持ちだったのか、正明も足を止めてくるつと素早く振り返ると、千春の唇に少し触れる程度のキスをして抱きしめてきた。いざ行動に起こされると理性を取り戻す、そんな自分の真面目さに千春は少しだけ腹が立った。

「ちよっ！ やばいつて！」

千春は焦り、両手で正明をそつと押し返した。正明はそれに抵抗することなく離れ、千春の顔を覗き込んできた。

「で、どうした？ なんかあった？」

遠く離れた席からでも、ささいな顔の変化を見逃さないのは流石である。この人はそういう優しさがある。心臓に、細い針が刺されたようにちくつとする。自分より人を優先できる大人である彼の顔を凝視する。急に安心感が膨らんで来て、電話では返せなかった言葉を、千春は絞り出すように言ってから下を向いた。

「ん。おじいちゃんが危篤だって……」

もう正明の顔を見られなかった。今にも千春の目からは大粒の涙が零れそうだったからだ。周りに誰もいないとなると、ここで一旦泣き始めたら甘えすぎてしまう。

「本当に……？ 花火の時に会わせてくれるって言っていた？」

あまりにも突然の出来事で、正明も事態が飲み込めないようだ。聞き返すその声に、千春を呼んだときの野太さは消えていた。天井の蛍光灯が、事態の不安を増長させるように奇妙にチ力チ力と点滅した。今にも命の光が消えかけているように、ゆっくりと、しかし確かに……。

毎年夏になると、千春の実家の側では都内でも有数の花火大会が開かれる。最近では人込みがすごくて歩くのも大変なので足が遠退いていたが、実家を離れた今、無性に花火が見たかった。本音は火花が口実で、家族に会いたかったのだがそんなことは恥ずかしくて口になど出来ない。

「おじいちゃん！ 元気？……仕事？ 大変だけど楽しいよ。今度の花火帰るからね。あと、彼氏も行くから楽しみにしててね！」

「そうかい。楽しみだな。じゃあ夕飯も一緒に食べようねえ」

一週間前の、電話での何気ない会話がふと千春の頭をよぎった。思い出すだけで祖父の笑顔が目の前にあるような気になる。祖父は、家族が何回言っても廊下に置かれた電話の親機まで行くのを面倒がっていた。おかげで子機を使うことになるが、近年めつきり耳が遠くなり相手に何度同じ事を繰り返し聞いた。そんな祖父を反対に面倒くさいという輩もいた。それでも、千春にとっては可愛いおじいちゃんだったのだ。

「おい、大丈夫かよ」

千春は、不意に正明に肩を叩かれ我に返った。そうだ。回想などしている場合ではない。危篤ということは一刻の猶予も許されないのだ。先程胸に湧いてきた震えをバネに、今度は自らを奮い立たせる。動揺を隠すように、右手で冷静に前髪を掻き上げた。先日短くカットしたばかりの髪の毛は、千春の強い意志を表すように後ろへ

跳ねた。大きく息を吐く。

「うん。大丈夫だよ。ちよつと編集長と話してくるね」

場合によっては数日の欠勤が必要かもしれない。正明に向き直りまた部屋に戻ろうと歩き出した。その時だった。

「ちよーつと待った！ わかった！ 俺も行く！」

千春の手首をすぐさま掴むと、ゴリラもどきが必死で後を追ってくる。身体を前後に揺らしながら。

「え？ だって、まーくん仕事！ そりゃあ一緒にいてくれたら心強いけど」

千春は掴まれた腕を離し、自分の両手で彼の手を包み込みながら、不安そうに正明を見上げて言った。

「あー。やつとこつちを見てくれたな。いや、もうすぐ夏休みだしさ。俺は今の仕事に区切りついているし、編集長に頼んでみるよ」

その言葉に、千春の目から我慢していたはずの涙が一滴こぼれ落ちた。気丈に胸を張る

うとしても、こんな時に優しさを見せられると弱さが出てしまう。安心感で膝の力がふつと抜けそうになる。正明は、そんな千春の気持ちを知ってか知らずか、涙を拭く振りをして頬を触りまくった。しかし、その触り方に優しさはなく、いじめっ子が悪さをするように抓るほどの強さだった。

「やめてやめてえ。……でも嬉しい」

その手から逃げるように首を引つ込めながら、千春は小さく笑った。それまで静かだと思っていた廊下に、オフィスの電話の着信音が響いてきた。その音で、現実に戻る。廊下には、ずっとその音は聞こえていた。それでも千春の耳には届かなかったのだ。不安感に襲われ、自分だけで戦わなければいけない気がした。しかし、そうではないことに気づかされ、今度は安堵の溜め息を吐いた。相変わらず正明の手は、千春の頬を求めて宙を彷徨っている。

「よしっ！ では、いざ戦場へ！」

正明は真面目な顔に戻ると、ずっと千春の手をとって編集長の個室部屋に向かつて歩き始めようとした。と、途端に立ち止まる。

「あっその前に」

くるりと素早く振り返ると、彼は千春の唇に軽く触れる程度のキスをした。そして、今度こそ歩き始める。千春は、今だけはそんな彼を咎める気にはならず、彼の手をそつと握り返して後に従った。コンコン。

編集長の部屋のドアの前に、正明と千春は並んで立っていた。同じオフィスで働く者同

士、別段緊張することも遠慮することもないのだが、二人は怯えていた。まさに当たって砕ける覚悟である。それは、編集長の人間性への問題でもあり、新入社員という下っ端の立場による独特の緊張感でもあった。

「はい。だーれー」

ノックの後に中から聞こえたのは、優しそうな言葉の伸びとは裏腹にドスのきいた声だった。

「山下と高橋です。少しお話があるんですが」

正明は、いつもより少し低い声で返した。彼なりの、編集長への対抗意識やプライドであるのを知っているが、千春が常にそれを言及したことはない。

「おー。入れー」

返事があり、二人はドアを開けて順番に入った。千春は正明の体に隠れるようにして進む。

「なに。高橋、仕事はどうだ」

二人が部屋の中に足を踏み入れた途端にそう切り出したのは、編集長の藤田本人である。その男は、大きな出目金のような目で二人を睨みつけた。本人にはそんなつもりはないのかもしれない。身長一八五センチで細身、頬が少しこけてはいるが、かなりのハンサムである。女性からすれば、その視線さえも彼の魅力の一つになるだろう。ただ、部下にとっては、それが妙な威圧感を与えるアイテム

となっているのだ。背の低い千春は、特に藤田に見下ろされると、一目散に逃げたい衝動に駆られる。そう感じるのは、千春だけではないのが、社内の人間にいくつか証明されている。そんな彼は、人知れずハイエナと呼ばれている。仕事をしている人間の後ろをウロウロと這い回り、問題を見つけるとすぐさま怒りのままに飛びつくからだ。だが、運がいいことに今の機嫌は上々のようだ。

「順調です。校了も済みました。それで、二三日お休みを頂きたいです」

正明が肩を張って答える。用件のみを伝えるのもハイエナへの対処法だ。

「そ」

藤田は、驚く様子もなく、他の単語を発するのも面倒くさいとでもいうように、それだけ答えた。否定をされないだけで、有り難いのだ。

「ありがとうございます」

正明が頭を下げ、それに倣って千春も同じようなポーズをとる。社会人としていけないと分かっているにも、逃げたくなる。

「あれ。山下さんもいたんだー。なに」

藤田の冷たい言葉と、鋭い視線が千春に突き刺さる。最初から気付いていたくせに。ハイエナめ。そんな言葉を必死で飲み下し、一人でまた頭を下げる。

「私もお休み頂きたいんです。実は祖父が危篤なんです。すいませ

……」

正明のように要点だけ話せば、反応は違っただろうか。千春の言葉は最後まで説明する前に、藤田の低い声にうち消されてしまった。それも、その声音よりも残酷な言葉によって。

「あっそ。いーよー。山下さんいなくても困らないからー」

目の前が暗くなる。何の為にここにいるのだろう。こんなことを言うならば、なぜ自分を採用したのだ。ただ、今は自分の価値を探している場合ではないのだ。奥歯をぐっと噛みしめて、千春は数回瞬

きを繰り返した。そうすれば、怒りの感情が消える。千春がこの数ヶ月で見つけた技だった。早く退散したかった。一秒でも長く同じ部屋にいたくなかった。藤田が、この男女平等が叫ばれる社会の中で、未だ女を対等に見ないことは知っていた。その癖、女を狙うと早いとの噂もある。どこまで本当かは疑問が残るが、少なくともハイエナというあだ名が的外れではないと、千春は思っていた。藤田は、千春の反応を楽しむかのようにイスに踏ん反り返りながらも睨んでくる。限界だ。千春は一礼だけを残し、その場を後にした。

すぐに正明も部屋から出てきたが、彼に対しては藤田から「早く戻って来いよー」と言う優しい言葉が、扉が閉まる瞬間に追いかけてきた。正明が悪いのではない。しかし、同じ立場のはずなのに差別されているようで、部屋から出てきた彼の腹に、千春はすぐに一発軽いパンチをお見舞いしようとした。

彼は不意打ちを食らって一瞬避け駆けたが、すぐに自ら腹を差し出した。そんなことをされると、反対に殴りづらい。手を引つ込めると、千春は悔しさで潤んだ瞳で訴えた。しかし、部屋の中には聞こえないような小声で。

「どうしてあたしだけこんな扱いされるの？正明に来てくれなんて頼んでない！別に休まなくていいし！」

八つ当たりだ。数分前は喜んだくせにと、千春は自分に更に腹が立った。言ってしまったから、彼に怒られるだろうかと内心びくびくしてしまう。しかし、また一步負けたようだ。正明は、責めることなく千春の頭を撫でながら言ったのだ。

「あれあれー。ここにもハイエナがいるのかなあー」

そして、屈むようにして千春の顔を覗き込む。

「ま、向こうのハイエナのことは気にすんなよ。どうせ誰に対しても常に睨んでいるんだし。女としての獲物になるなつて」

と、さらに今度は笑いながら言う。ここまで慰められると、千春ももう膨れているわけにはいかない。

「あたしはハイエナじゃないもん」

涙を出さない代わりに主張し始めた鼻水を、千春は人差し指で拭いながら笑っていったが、胸中は複雑だった。

正明にはわからないんだ。必要とされているから……。

あたしが嫌だったのは、睨まれたからじゃない。女は……、なによりあたしが役立たずって言われた雰囲気嫌だったのに。

「よっし。じゃあ行きますか」

正明は、そんな千春に気付かないようだ。彼女の肩に手を置くと、気合いを入れるようにその手にぐっと力を入れた。

「はい」

二人は、軽い机の整理と休みの報告のために席に戻ったが、同時に休暇をとることを周りに冷やかされ、千春が独身の先輩に厭味を言われたのは言うまでもなかった。

2 病院

会社を出た二人は、一度荷物を取りに各自の家に帰った。お互いが会社から反対方向に歩いて十分ほどのところに住んでいるので、三十分後に新宿駅の東口に集合することにした。千春は祖父を思えば何も手につかず、家に帰っても何を持っていけばいいのか見当もつかない。とりあえず、着替えと化粧品だけを持って駅まで走って行くと、正明はまだいなかった。駅前にあるバス用ターミナルのガードレールに寄り掛かりながら、携帯を鞆から取り出し、着信履歴から実家を選んでかけた。数コールの後、その音が途切れて父親の声がした。電話の向こうはいやに静かだ。

「はい、山下です」

「あ、お父さん。千春。今新宿駅からそっち行くんだけど、お母さんいる？」

「ああ。いるけど、今バタバタしていて。お父さんじゃだめか？」

「うーん……。うん。なるべくなら」

「そっか。よし、待っているな」

受話器から、エリーゼのためにが流れてきた。それだけで家が恋しくなる。昔ピアノを習っていた千春が、唯一今も弾ける曲だ。その曲を聴きながら、頭の中で音階を追いつまむを思い浮かべる。電話を耳に当てていなければ、両手が勝手に動き出しそうだ。

千春の家は、父親の性で母親の実家に同居している。今回倒れた祖父は、母方の祖父である。動転しているのは母親の方なのだ。また、去年は歳の離れた兄も結婚し、今では珍しいだろう三世代同居を、千葉にほど近い東京で行っている。千春も会社に通うことなど実家からでも出来た。実家にいたかった。しかし、結婚した兄の脇でなんだか居場所を失い、社会人になると同時に半ば飛び出す形で一人暮らしを始めたのだ。しかし、こんな状態になるなら実家に住み続け、ずっとおじいちゃんといればよかった……。と、後悔で知

らぬ間に涙が溢れる。旅行用のバックを片手に携帯で話す千春を、目の前にある交番のお巡りさんが、不審気に見てきた。失恋でもしたのか、家出娘かもしれないと考えているのだろうか。周囲の人間は、友達との会話や待ち合わせの人を探すのに夢中で、千春など目にも入らない。ひとしきり、人目を憚らず涙を流す。こうして人混みに紛れている方が、社内の人気の無いところで泣くよりもどこか目立たない気がした。

「もしもし！ 千春？ 今日戻って来られるのね？」

母千恵子の声が聞こえてくる。泣いていたのがばれないように、一度携帯を顔から離して思い切り鼻水を吸った。その音は、常に移動しているタクシーやバスの音にかき消された。小さく咳払いもおまけしてから、電話に向かって話し始めた。

「あ、お母さん。うん、三日は平気そう。無理矢理休ませて貰った」
本当は呆気なかったが、千春にも多少のプライドがあった。それに、心配もかけたくはない。

「あとね、ちょっと一人余計に連れてくから」

恥ずかしさから、口調が幾分早口になる。このせいで父親には言えなかったのだ。父親にとっては、これは義父の病より涙を流す原因になりうる話だった。それに、もしも今更連れて来るなど言われたら、正明に立つ瀬がない。母親なら安心だと踏んだのだった。周りの騒音と早口のせいで聞き返され、同じ事を少し大きな声で繰り返した。

「え……それって。千春今恋人いるの？」

いきなりの話に母親も驚いたようで、素っ頓狂な声を出した。

「やだ！ お父さんに聞こえる！」

千春は慌てたが、母に返答を求められて続けた。

「会社の同期の人なの。夏休みに花火連れてくつもりで、おじいちゃんと約束していたの」

祖父の意識はないかもしれない。それでも、会わせたかった。

「そっかあ。じゃあおじいちゃん喜ぶね。実は朝型トイレで倒れて、

今意識がないんだけど……、きっと元気になつてくれるね……」

最後は涙まじりの声で、聞き取りにくかった。おそらく、朝からずっと気丈に振る舞っていたのだろう。病院では、医師の話を一言も聞き漏らすまいと真剣に聞き、さらに質問などをして詰め寄ったかもしれない。それでいて、エレベーターやトイレなど一人の個室で、声を殺して泣くのだ。母は、昔からそうだった。強く気取る、弱い女性だった。早く行つて、側にいてあげたい。千春は、そう思った。

「うん、多分一時間しないで着くと思うから。着いたらメールする。お兄ちゃんにもよろしく言つてね」

母親は、正明について詳しく聞きたがったが、後でゆっくり会おうと電話を切った。すると、それを見計らったかのように正明が小走りですべて来るのが見えた。人混みをかき分け、荷物はあまり持つていないようだがスーツを着ている。先程千春を見ていた交番のお巡りさんも、正明の出現で安心したのかもう見てはいなかった。

「ごめん、待った？ 荷物に迷っちゃって」

正明は、暑そうに首元のネクタイを緩めた。千春の手から鞆を取ると、自分の肩にかけた。

「ううん、平気だけど。なんでスーツ？ 暑いじゃん。しかも行くの病院だよ」

「いやさ、一応半分挨拶に近いし。俺、私服ほぼジャージだし」

正明はしれつとした顔で言うつと、改札へと向かつて一人歩いて行く。あの人才シャレをすればもつとかつこいいのに、と思いながらも千春は無言でその後を追いかけた。

三十分後、電車で揺られて地元の駅まで辿り着くと、駅前の商店街にあるケーキ屋も弁当屋も全て閉まっていた。街灯も数少ない。たまに開いている飲み屋の中から漏れる明かりが、通りを照らす。今では寂れてしまった通りを抜けながら、正明は手土産がないことを、頻りに気にした。お菓子とはもなく、お見舞いのお花だけでも

買いたいと言うが、店が開いていないのだから仕方がない。隣でぶつぶつと呟き続ける正明を、煩いと思いつつも微笑ましかった。同年齢の男の人は、大抵ここまで気にしないだろう。通りの両脇にある小さな店を、思い出話を交えて話しながら十分ほど歩くと、病院へはすぐに到着した。

この病院は、昔からある区の古い総合病院である。千春も幼稚園の頃、この病院の目の前の川で兄と遊んでいて溺れ、運び込まれた末に数日入院したことがあった。しかし、その後は家族の中で入院するほどのお世話に誰もなつたことがなく、とても久しぶりだった。病院は、用事がなくても、そこに建っていてくれるだけで安心するものだ。しかし、身内が入院となれば話が別だ。祖父を奪ってしまふ巨大な魔の手に見えてくる。薬の微かな臭いさえ胸につかえる。とりあえず夜間入口から入ると、誰も見当たらないので母親にメールを送る。

「ロービー」に来了。二人でいるから、とりあえず一人で迎えに来て彼氏を両親に会わせるのは初めてだ。ここが病院だということも忘れるほどに緊張する。なぜか急に気分が悪くなってきたが、それが不安のせいだ緊張か、もう分からなかった。長椅子に二人で座っていると、エレベーターの到着する音が廊下の向こうから聞こえた。そして、現れたのはエプロンをつけたままの母、千恵子だった。すぐに気づいて千春たちに駆け寄ってくる。そこに、緊張の色は全く見えなかった。それが、彼女らしさでもある。ふくよかな体つきは数ヶ月前と何も変わっていない。

「遅かったね。待っていたんだよ。早く上においで。おじいちゃん、一人部屋にいるから」

千恵子が千春に話しかけた。せかすように、千春の腕を掴むが、目線は正明へ一直線である。

「うん、あのお母さん。高橋正明さん。心配してくれて。おじいちゃんに会わせる約束していて」

それでも千春が恐る恐る言つと、正明が落ち着いて引き取った。

「こんばんは。差し出がましくありません。高橋です」

「こちらこそ。千春の母です。よく来てくれましたね。ありがとう」
昔から千恵子は子供の千春から見ても、初対面の人が苦手なのだ。それだけ言つと、さつさとエレベーターへ向かつてしまふ。千春も人見知りなので、母の気持ちもわかるが、正明は多少申し訳なさそうだった。そんな正明に優しく微笑むと、前に歩く母親に見えないように千春は彼と軽く手を繋いだ。そしてすぐに離す。エレベーターに三人で乗り込みと、千恵子が四階のボタンを押した。そこは車椅子が入るようにと、とても広かった。

「おじいちゃん、意識はほとんどないから。でも、話しかけてあげて。あと、そんなに長くないみたいなの……」

千恵子が涙声で言つた。千春達に背中を向けているので、表情は幸いにも見えない。それが、今は有り難かった。

「分かった。……トイレで倒れたつて、また心臓？ どこが悪いの？」

祖父は、数年前に白内障の手術を受けたことはあったが、これといった大きな病歴があるわけではない。前から心臓が痛い、息切れがするなどで通院はしていたようだが、発作を起こすことなどはなかった。こんな時がいつか来ると頭では分かっている、それでもどうして、という気持ちが拭えない。

「それが……、頭、なのよ。それと、千春。おじいちゃんが飲んでいた薬、心臓の薬じゃなかったつて……知っていた？」

千恵子が衝撃な言葉を発した。

「え……？ 頭つて、血管？ 切れたの？ それに飲んでいた薬が違つて」

千春は驚いて、祖父が飲んでいた薬を必死で思い出そうとしたが無理だった。黄色い粒を飲んでいた気がするが、覚え間違いかもしれない。と、エレベーターが目的の階に到着した音が響いた。ドアが、開き三人は重い空気を纏いながら廊下へと出た。夜なので人気は全くなく、入院棟のどの部屋の寝静まっついていて真つ暗だ。それと

対照的に廊下の明るさが、目をくらませる。おそらく一番奥が祖父の部屋だ。唯一その部屋からだけ明るい光が漏れている。

「あのね、切れたんじゃないの。血管に血が詰まったんだって。脳梗塞ってやつよ。切れた場合は脳溢血って言うみたい」

千恵子が、思い出したように呟いた。

「おじいちゃん胸が苦しいって心臓の薬飲んでいたでしょ？ 心臓の薬って、血を固めちゃう作用があるらしいのね。あ、これは前におじいちゃんから聞いたの。だから心臓の薬には、血液をさらさらにする薬もあるんですって。何種類も飲んでいた。だから、お母さんは今日先生に、おじいちゃんがその薬を飲み忘れたのかと思うって言ったの。そしたら、確かめられる限り心臓は正常だし、薬も飲んでいなかったみたいだって……」

そこまで言うとき恵子は黙ってしまい、三人はただ暗い廊下に佇んだ。それでは、祖父は何を飲んでいたのだ……。遠くから、救急車のサイレンの音が近付いてきた。その音が廊下にも響くくらい真下に来るのに数秒しかかからなかった。その音が止まると同時に、千春は口を開いた。

「なに……それ。じゃあ、おじいちゃんはあんなに何を飲んでいたの？」

千春は、反抗するように小さな声でそう言うと、明かりのある病室へ駆けていった。足音を出さないようになど、気を遣う余裕などない。綺麗に掃除されている床の上を、履いているヒールのかかたがコツコツと叩く。シューズを履いてくればよかったと思いながら、病室のドアを勢いよく横にスライドさせた。

「おじいちゃん！」

千春が病室に駆け込むと、中には兄と父がいた。しばらく見ない間に、父親は少しだけ痩せた気がする。二人で祖父を挟むようにベッドの両脇に座り、祖父の両手をそれぞれが握りしめていた。祖母と兄嫁の姿がない。実家で待機しているのだろう。祖父は、鼻と口を覆うように酸素マスクを当てられ、心電図の機械が脈拍や血圧な

どを写し出していた。静かな病室には、ピツピツいう規則正しい音だけが響く。……まだ生きている。祖父がまるで存在を主張するかのような電子音。一度聞いてしまうと、それが止まってしまつのではないかという恐怖感が沸いてきた。入り口に立ったまま、千春の足が動かない。手を握りたい。力を分けてあげたい。大好きなおじいちゃんだ。それなのに、近付くのが……こわい。顔を間近で見るのが、目を開けていないのが……こわい。ただ、その場所から呆然とその姿を確認した。

「千春、おかえり」

父の優しい声だった。そして、祖父のベッド脇の椅子から立ち上がる。

「あ……、ただいま……」

病院で言われる、「おかえり」という言葉は、とても違和感があった。それなのに、安心感が胸一杯に膨らんでくる。そして、それが帰省を怠っていた後悔と重なって倍になる。風船は、もう限界だ。身体の内臓という内臓を押しつけて増長していた感情という風船が一気に破裂した。のど元まで来ていたそれが、破裂によって口から飛び出した。

なんで、ここが家じゃないんだろう。

なんでおじいちゃんは、こんな体でここに寝ているんだろう。

なんで……こんなにも涙が……悲鳴のような嗚咽が溢れるんだろう……。

我慢しようと思えば思うほど、止まらなかった。息を止めようとすると、数秒後には溜めた分だけの息を吐く。そしてそれは苦しかった。数度繰り返し返してから、千春は我慢することを止めた。思い切り泣きながら、千春はベッドに近寄った。兄が、驚いたような顔で自分の座っている椅子をずらしてくれた。その兄の目も、真っ赤だった。父が握っていた方の、祖父の手を今度は千春が握りしめた。大丈夫、温かい。そう自分に言い聞かせる。何ヶ月か会ってないだけなのに、なぜか何年もこの手に触れていなかった気がする。

「お前は？」

父親の鋭い声がドアに飛んだ。その声で、正明を母親と残して来た事を、千春は思いだした。

「お父さん、千春の彼氏だって。心配して来てくれたんだよ。優しいね。明日おばあちゃんにも会ってもらわなきゃね」

フオーするように、千恵子が高橋の背中を押した。病室の中へと入ってきた高橋は、藤田の目の前でするように胸を張った。しかし、それも大して効き目はなかったようだ。

「そんなの聞いてないぞ。いつからだ、おい！」

父親が、いきり立って高橋に詰め寄った。背丈は高橋に全然叶わない父も、娘の前という威厳を保つためか、オーラは負けていない。脇で傍観する兄は、まるで中学生がやるように、ひゅーっと口笛を吹いてはにやにやしている。それでも目が赤いことから、兄もこの家系の象徴ともいえる強がりの性格をきちんと受け継いでいるようだ。しかし、それが父親の刺激剤となっているのは、意図して煽っているのか。

「高橋です。千春さんとは会社の同僚としてもお世話になってます」

正明はまた編集長に対しと同じように、少し声を低くして答えた。異様な緊張感が部屋に流れる。一足触発、まさにそんな感じた。千春は、あからさまに正明に敵意を向ける父の背中を引っ張って言った。

「ちょっと！ お父さん、つかからないでよ！ 彼をおじいちゃんに会わせる約束していたんだよ。だから、わざわざ来てくれたんだよ」

涙声で千春がその背中に叫ぶ。

「え？ お義父さんと……？」

父親は、仲間ハズレにされたような寂しさを覚えたのか、急に無言になると一人病室を後にした。残された部屋に、気まずい空気は一切なかった。それよりも、ふてくされて出ていった父の代わりに

と、今度は兄が正明に椅子を勧める。

「あの、なんかすみません。お見舞いさえできれば、すぐに失礼するので……」

どこまで本気だろうか、正明はそう言った。だが、簡単に意志のないことを口にする男ではない。

「いいの、いいの。さ、来て！」

千春は何事もなかったように、手で兄がどいた椅子へと正明を招いた。少し困ったように千恵子の顔を振り返った正明も、彼女が頷いたのを確かめてからそこへとやって来た。

「じゃあ、千春。お母さんたち一旦帰るけど、あんたどうする？」

ここね、二人までなら泊まっていいらしいの。正明さんも、仕事で疲れているだろうし家に帰って寝る？ ベッドもあるし」

荷物をまとめながら千恵子が言くと、兄も頷く。ここにいても、何も出来ないことを誰もが分かっている。しかしそれでも……

「できれば、ここにいたい……」

千春は、祖父の顔を見ながら言った。それを見て、正明もが千恵子に向かって頷いた。

「分かったわ。じゃあ千春、お母さんまた明日の朝すぐ来るから。あと、お父さんのことは気にするんじゃないよ」

「うん。全く気にしてないから平気。むしろ、すでに忘れていた。なんかあったら電話する」

少し冷たいかなとも思ったが、それは千春の今の率直な感想だった。

3 再会

千恵子と兄が帰った後、千春と正明も寝ることにした。ホッと息を吐いてみれば、ずっと下を向いて仕事をするからか肩が張っている。少し左右に身体を捻れば、背骨がポキポキと鳴る。簡易ベッドの上で、千春は身体が引きちぎれそうになるくらいに伸びをした。その快感で、自然に「うっ」と声が漏れる。

「電気消すよ？」

何度目かのそれを繰り返した時、正明がふいに聞いてきた。荷物が少なかったように見えて、ちゃっかりパジャマを持ってきていたようだ。いつも背広姿ばかり見ているせいか、どこか照れくさい。反対に千春はパジャマまで気が回らず、今日着ていた私服のまま横になった。なんとも抜けている自分にため息が漏れる。今更実家に服を取りに行くのも面倒だ。病室の中の筆笥を開けてみたが、入院しているわけではないので、着替えがあるはずもなかった。

「うん。ねえ、手……つないでもいい？」

真っ暗になった部屋で、呟くように千春がオドオドと尋ねた。ギシッと正明も隣のベッドに上がった音がする。簡易ベッドはすぐ用意出来、動かせるのであるべく近づけた。電気を消しても、廊下からの明かりで部屋の中は薄暗い程度だ。いきなり祖父が普通に目を開けるとは思わなくとも、隣で抱き合って寝る訳にはいかない。二人は並べたベッドで別々に寝ることにしていた。それでも、どこか触れていたい。もし、祖父が目覚めてこの状況に驚き、怒るならばそれは大歓迎だと思った。そしてそう考えると、少しだけ笑えた。「喜んで。でも、おじいちゃんの前だと緊張するなあ」

正明が照れたように言ったが、その手は戸惑いもなくすぐに千春の布団の中に潜り込んできた。

「今ね、あたしも同じようなことを考えていた。きつと目が覚めたらちよっとは怒るかなっ」

て」

「でもさ、ただ寝ているだけでも優しさが伝わるような雰囲気のおじいちゃんだな。千春に似ているよ」

「なあにーそれ。褒めているの？ ……なんか嬉しいかも」

千春は暗闇の中で、一人微笑んだ。キュツと正明の手に力が込められる。

「でもさ、本当にさ。怒らなそうだよな」

「確かにね……。あたし、怒られこつて一回だけしかないかもしれない……」

「どうして怒られたの？」

「あのね……。あたし、小さい頃おてんばで、我が儘な子供だったんだよ。……今より」

「そりゃ、ひでえな」

正明が、からかつて意地悪を言う。彼と話していると、これから怒るだろう不安に対しても安らぐことが出来た。身体は疲れ切っていて眠りにつきそうなのに、簡単に眠れそうにはない。

「もうっ！」

千春は布団の中で握っていた手を振り払った。隠すように、自分の手をお尻の下に隠す。

「嘘うそ。それで？」

正明は振り払った千春の手を探して布団の中を探った後、また握りしめて言った。

「フンっだ……。でね、さっきいたお兄ちゃんといつも喧嘩していたの。歳が離れているのにね。あの人、すっごく意地悪だったんだよ」

「千春がうるさかったんだろ」

今度は、正明の妨害など構わず話し続けた。一つ一つに反論していたら、朝になってしまう。むしろ、思い出したかったのかもしれない。たとえそこに他に誰がいようと。

「幼稚園の時にね、お母さんが入院したの。それで、何ヶ月かおじ

「いちゃんとおばあちゃんが全部の世話をしてくれたんだ。でもね、小さいからやつぱりお母さんが悲しくて、毎日悪戯ばっかりしていたの。ほとんど赤ちゃんが返りのようだったと思う」

「そりゃあ、可愛かっただろうな。千春の悪さをしている姿」

隣のぼんやりとだけ見える正明の顔に向かって、千春は悪戯を企む子供のように、にんまりと笑って見せた。今度は、そうだろうそうだろう、と呟いてみる。

「でもね、かなり酷かったみたいなの。勿論、ほとんど覚えていないんだけどね。ご飯は全然食べないし、お兄ちゃんに喧嘩ふっかけるし。おばあちゃんは、食べ物や遊びの我が儘を全部聞いてくれた。お母さんのいない隙間が少しでも埋まればって。でも、おじいちゃん黙って見ているだけだったんだって。我が儘を言っても怒らなかったけど、決して聞いてもくれなかった」

「ふーん。で？　なんで怒られたの？」

「そうそう。どうしてそんな行動を取ったのか分からないけど、あたしが勝手にベランダから落ちたの」

「はっ！？　ベランダ？　二階の？」

正明は驚いき、思わず枕から首を持ち上げた。そんな彼をよそに、千春はクスクスと口から笑い声を漏らす。

「そう。笑えるでしょ？　ベランダの手摺りを歩こうとしたみたいなんだけどね。残念ながら、目撃者はゼロ」

「へー……。それは、かなりのおてんばで。今度写真見せてよ」

結局、そのおてんば娘は今も元気に隣にいるわけだ。それも、普段社内ではそんな素振りをちつとも見せずにすまして座っているくせに。そう思えば、なんだか正明まで笑ってしまった。

「いいよ。もう顔中が傷だらけ。でも、下が土だったし、クッションとなる木の葉にも偶然守ってもらえたって。で、発見者がおじいちゃん。あたしは何が起こったのか分からないで、目を丸くしたまま土の上に転がって空を見ていたんだって。反対に、おじいちゃんがびっくりして発狂したの。皆が止めても一目散に病院に担いで行

つたんだって。結局は打撲で済んだんだけど、帰ってきたら何時間ものお説教。それは、凄い覚えているの。だって、最後に頭をグーのパンチでゴーン！」

「あはは！ まじで？」

正明は、思わず吹き出してしまった。まるで男の子の昔話みたいである。当の正明でさえ、そこまでの武勇伝は持ち合わせてはいない。

「それから一週間くらいかな……。しばらくは、おじいちゃんと話せなかった。わざと拗ねてご飯の時間ずらしたり、お風呂も夜まで待ってお父さんと入ったり」

「ふーん。切ないねえ」

「子供なりに真剣だったんだよ。でも、ある日幼稚園に行く前に、おじいちゃんがアメをくれたの。気をつけるよって言いながら。そのアメ……。随分長い間食べられなかったなあ……。」

こうやって話せば話すほど、不思議と忘れてたことを鮮明に思い出すことが出来た。その当時にしかなかった置物や、障子の模様。おもちゃや絵本の数々……。目を閉じて手を伸ばせば、それらに触れる気がした。

「溶けていて？」

横から正明の茶化が再び入る。お気に入りだった人形をどこに閉まっていたか、やっと思い出せそうな瞬間だったのに一気に現実を引き戻され、千春は思わず声高に返事をする。

「ちがーう！ おじいちゃんとの仲直りの証だったから！ 言葉で謝られるより、子供のあたしには宝物だったの！」

少しずつ眠気が増してくる。それが、千春の感情を素直に言葉にする材料となっていく。

「怒るなって。分かっている。なんかさ、こう……。話を聞いているだけで、感じるよ。二人の絆とか、愛情みたいなもの」

これも、正明の本心だった。友達でも恋人でも得られないような何かが、千春と祖父をすっぽりと包んでいる空気があったのだ。そ

れは、自分たちには分からない。けれど、他人から見ればよく見える。そして、ちよっぴり羨ましくなる、何か。

「そうなのかな……。でも、あたしいつの間にか忘れていたよ」

「俺はさ、物心ついた頃には、じいちゃんもばあちゃんも両方死んじゃっていたからさ。そういう感情は想像しか出来ないけど、人間ってそういうものじゃないかな。時間が過ぎれば忘れてしまう。いくら辛くても、怖くても。それがプラスに働く時もあるけど、大抵は……。悲しいことなのかな」

考えてみれば、そうかもしれない。たとえ辛いことでも、その時頑張ればあとで良かったと思う。過去の自分に感謝することもある。反対に、後悔することもあるだろう。しかし、受験勉強や、友達との喧嘩、みんなあとから思い出せば「いい思い出」になるのかもしれない。記憶の筆筈にしまい込み、必要な時にだけ取り出せれば充分なのかもしれない。全てを完璧に記憶しておくことなど不可能だし、しかしそれならば、今こうして祖父が隣で苦しんでいることも、それを心配して自分の胸が不安で張り裂けそうなのことも、数年もすれば忘れてしまうのだろうか。千春は、当たり前のことだと思っても、それをどこか受け入れたくはなかった。

「でもさ、その時はお母さんに全然会えなかったの？」

正明が、クイツと千春の手を自分の方へ引き寄せながら言った。カツン、カツンと廊下を歩く足音も聞こえてきた。看護師が夜回りでもしているのだろう。話し声が廊下には絶対に漏れないように、千春はさらに今までよりも小さな声で言った。

「ううん。何回かはお見舞いに行ったかな。確か家族みんなで」

この記憶も、ぼんやりと曖昧なものだ。千春の脳みそが記憶していたというよりも、後に昔話として家族に語られた話を、自分の頭の中で映像化していると言ってもあながち間違いではないだろう。

「そうなんだ。久しぶりに会えたなら嬉しかっただろうな」

「そうなの。……。病院行ってお母さんの顔見たら、あたし嬉しすぎてベッドの上に飛び乗ったんだよね」

「本当に？ 大丈夫だったの？」

「そういえば……。お母さんが叫んで。……あたし、その時もおじいちゃんに頭げんこつされたような……」

今更ながら、黙っておけばよかったと、千春は思った。しかし、気づいた時には手遅れで、再び正明は豪快に吹き出してくれたのだ。

「あはは！ なんだよ、それ。怒られまくりじゃん！」

無性に恥ずかしくなり、千春は正明の手を離すとくるりと反転して彼に背中を向けた。

お腹までかけていたタオルケットで頭まで被る。正明の手は、もう追いかけてはこなかった。その代わり、数分間途絶えない笑い声が静かに病室に響く。

「もついいじゃん。寝ようよー」

祖父の様子に変化はない。それに正明と昔話を話したことで、病院へ到着した時よりも幾分気分が優れるようになった。もしかしたら、気持ちをほぐそうとしてくれたのかもしれない。千春は、そんな彼に感謝しつつも、今は拗ねた振りをした。そして、眠りに落ちようとした時、ふと沸いた疑問を口にする。

「おじいちゃんも……。覚えていてくれるのかな……」

返答は、求めていなかった。正明が眠ってしまったのならそれでいい。しかし、

「覚えてくれているよ」

その優しい声が、千春を完全に眠りの世界へと引きずりこんでいった。

仕事の疲れからか、千春は数時間熟睡出来たと思った。朝日が差し込んでいるのか、または部屋の電気を点けられたような気がして目が覚めた。その目覚めに眠りを遮られた不快感はなく、どこかスツキリとしたものだった。しかし、目を開けたものの部屋の電気は点いていない。正明は静かに寝ているようだ。祖父のベッドも特に異常はないようだ。枕元に置いておいた腕時計を手にとると、そ

れが二時丁度になっていた。案外眠ったようでほとんど寝てはいなかった。時計を置き、体勢を変えてもう一度眠りにつこうと、目を閉じた。

数分もしないうちに、再び周囲が明るくなった気がした。朝になっていないことは分かっているので、今度はしばらく目を開けずに待ってみた。何が起こっているのだろうか。不意に、右側に違和感があった。寝ている祖父しかないはずなのに、人が通ったように風が吹き抜けたのだ。誰かがいる、瞬間的にそう思った。薄目を開けて、様子を窺う。すると、右の方にだけ光があるのだ。窓から差し込んでいるわけではない。祖父の手が、身体が光を放っているのだ。いや、祖父が光に包まれているというのが正しいだろう。まるで、生きるパワーを全て発散させているようだった。もしかしたら、祖父がこのまま死んでしまうのかと思った。慌てて布団から跳ね起き、靴も履かずにベッドを下りる。ひんやりとした床が裸足に伝い、その感触が夢ではないことを確認させる。両手で祖父の肩を掴み、思い切り揺さぶった。酸素マスクも顔に合わせて揺れる。それが、頭の血管にどう影響するかなど、考えもしなかった。ただ、気づいて欲しい。

「おじいちゃん。おじいちゃん！ ちょっと待って、逝かないで！」
揺さぶり続けながら、ナースコールを押そうと手を伸ばす。しかし、意外なことに心電図機を見ると、正常に脈打っているのだ。ドラマや映画によくあるシーンのように、死ぬ間際に響くような効果音もない。

それならば、この光はなんだ？

どこから来ているのだ？

様々な疑問が頭の中を駆けめぐりながら、揺さぶるのをやめ、祖父の布団をそつとめくってみた。確かに体全体が発光している。身体から離れた布団に、もう光はない。思わず、千春は祖父の隣に横になり、寝ながら抱きしめた。そうすれば、その異様な光を貰えるような気がした。自分の気持ちも伝わる気がした。おじいちゃん、

まだだめ、逝かないで。まだ話したいこといっぱいあるよ。思い出も話そうよ。お願いだから、死なないで。

心の中で、何度も繰り返しながら祈る。どうすればいい。温めるべきなのか。声に出して助けを呼ぶべきか。散々迷ったが、千春は何も出来なかった。ただ、抱きしめる。そのうち、こうしていることが幸せにも感じられた。数分ほどすると、徐々に光が薄くなってきた。部屋の中が、暗闇に戻りつつある。千春は覚悟を決め、祖父から離れた。もう、ナースコールを押そうとも思わなかった。おじいちゃんはおじいちゃんが見送るからね。そう決心すると、涙がほろほろと流れてきた。流れるまま、拭かずに立ちつくしていると、やっと祖父が少し動いた。そして、次の瞬間それは微かな動きではなく、朝普通に目覚めたように、むっくりと起き上がったのだ。そして、自分で酸素マスクを取り何事もなかったような、第一声。

「お、千春。来たか。来なかったら行くつもりだった」

千春は、訳が分からずに開いた口も塞がらない。涙が、これで最後だとばかりに頬を一流れ落ちたのを機に、垂れかけていた鼻水を思い切り啜る。ここまで高ぶった気持ちを、どうしろというのだ。

「おじいちゃん……。元気じゃ……。」

千春はホッとして、上半身をベッドに倒れ込ませた。祖父の顔を見上げるように言う。

「そうだ！ おじいちゃん！ これこれ、この人。花火大会で一緒に来るって言うていたんだよ。おじいちゃんが倒れたって聞いて、心配して一緒に来てくれたの。ゴリラみたいでしょ。意地悪ばっかり言うけど、賢いんだよ。明日いっぱい話してほしいな。あーよかった。これで、花火も一緒行けるね」

一気にまくし立てるように話し掛けながら、千春のベッド脇から正明を振り返った。その紹介に答えるように、正明が一つ大きな鼻を掻いた。意識もはつきりしている祖父の両手を握りしめ、感謝するように目を瞑った。

「千春……」

そんな千春に、落ち着いた祖父の声が降ってきた。しかし、どこか様子がおかしい。考えてみれば、朝倒れて救急車で運ばれた人間が、こんなにも素早く起き上がれるだろうか。いや、無理だろう。たとえば目が覚めても、自分がどこにいるのか、どうして寝ていたのかわからずに混乱するものではないか。それに、体全体の発光は止まったようだが、まだ光が漏れている。どこだ。あれはなんだ……。

「なに？」

聞いてはいけない気がした。祖父は生きている。死の淵から戻ってきた。それなのに、祖父が目覚めてからの方が、なぜか胸騒ぎがするのだ。

「千春、おじいちゃんはな……」

「なに！ おじいちゃんはもう大丈夫なんだよね！」

千春は、必死でくらくらいついた。否定されないように、語尾が強くなる。それくらい真剣であり、それくらい祖父は元気に見えた。

「千春、よく聞きなさい。千春が恋人と会いに来てくれて嬉しいよ。もし、お前が来なかったら、私は新宿まで飛ばなければならなかった。その分時間も減ったかもしれない。だから、お礼を言わなくてはいいけない。私は、戻るなら、千春とだってすぐに思ったからね」

祖父は何かに追われるように一気に話す。

「なに、おじいちゃん。全然分からないよ。戻ってどこに？ あたしが戻って来たんだよ？ それに、新宿まで飛ばって……。スーパーマンにでもなるつもり？」

祖父の言うことに、頭が混乱した。血が詰まるとこういうことを言うようにでもなるのか。まさか、自分の頭がおかしくなったわけではあるまい。ところが、次の瞬間衝撃の一言が祖父の口から飛び出したのだった。

「おじいちゃんは、明日死ぬ」

4 十の珠

祖父の言葉を聞いた瞬間、千春の目の前は真っ暗になった。背後から強い力で頭を引っ張られたように倒れそうになる。今さっき引っ込んだと思っただけの涙が、また滝のように流れ出して千春の頬を流れ、ベッドの上にボタボタと落ちた。何もかも放り出し、祖父に抱き着きたかった。しかし、身体が動かない。まるで自分が、医者に余命を告げられたようだった。いや、それと同じくらい大事な人が、自ら明日死ぬと言うのだ。昔、川で溺れた時よりも息が苦しかった。耳元で鐘の音が何重にもなって響いているように耳鳴りがあった。口の中がどんどん乾燥してくる。意識をして唾液を絞り出し、舌で唇を濡らす。

「なん……で。おじいちゃんがどうして？ そんなことがどうして分かるの？」

どうして祖父が死ななければいけないのだ。そして、そんなこと人間がわかるわけがない。疑問が、中途半端な言葉だけになっては途切れていく。そんな千春を、祖父はベッドの上から微笑みながら眺めている。そうだ、これは冗談だ。祖父の穏やかな顔を見ていると、自分が冗談に騙されているのだ、と思える。そして騙されていると思っても、怒りは沸いてこない。むしろ、お願いだから騙してくれと心が悲鳴を上げる。

「相変わらず千春は泣き虫だ。ほらほら、泣き止んで、おじいちゃんの話聞きなさい。昔みたいに、一緒におやつでもしよう。お茶は……、と。……どうも、ないみたいだがなあ」

キョロキョロと部屋の中を見回した挙げ句、祖父は茶目つ気たっぷりの目で笑った。

「分かった……。おじいちゃん、話は聞くよ。でも、死ぬっていうのは取り消してくれない？」

そんな目で見られたら、泣いている方が馬鹿らしくなってくる。

千春は、涙まじりの声になりながらも、椅子にきちんと座り直して言った。背筋をぴんと張る。ご飯を食べる際にも姿勢を伸ばしなさいと教えてくれたのは、この祖父だ。まだまだ教えてほしいことだつて、たくさんある。

「それがなあ、無理なんじゃ。もうこれを貰ってしまったてなあ」

これ、というのが何を指すのかはすぐに分かった。祖父の身体から発光していたと思つた原因だった。祖父はそれに手を伸ばす。なにやらパンパンに膨らんだ巾着を入院着の中から取り出したのだ。巾着自体が、光を放っている。何だろう。祖父は、貰ったと言わなかったか。一体……誰に……。

「なあにそれ……。それだったんだ。光の正体……」

思わず目が惹き付けられるほどの美しい光。ダイヤモンドでさえここまではつきりと目に見える光を放つことはない。

「そうじゃ。これはな、十の珠と言うんだとな」

「十の珠……？ 一体、いつ誰に貰ったの……？」

千春は小さい頃に戻ったように、首を傾げて祖父に聞いた。まるで、空はどうして青いの？と聞くように。そして、当時千春に答えたのと同じようにゆっくりと祖父は言った。

「ようし、教えてあげよう。そのかわり、最後まできちんと聞くんだよ？」

そう、祖父はいつも必ずこう言った。共働きの両親、家事をする祖母、部活にあげくれる兄。そんな中、祖父だけがいつもこうして、どんな些細な質問にも答えてくれた。

「うん」

素直に頷いた千春を見て、祖父は一度時計を確認すると話し始めた。ゆっくりと、咳き込むことなども無くとても滑らかに。

「千春。これはな、十の珠と言って、過去の十の場面に戻るための物なんだ。そう、いつでも自分の記憶にある時代にな。生まれた時から今まで、いつでもいいんじゃない。でも、それには付添人が必要なんだよ。それを千春に今夜してもらいたいんだ」

「十の珠で過去に行ける？ そんな、おもちゃみたいなもので？」

「そうだ。これは、死ぬ間際の人間が引き渡すものなんだ。おじいちゃんは、さつきこの階の反対側の一番奥の部屋にいる人が持つて来てくれたんだ。その時、使い方の説明もしてくれた。あんまり千春がおじいちゃんに抱き着いて泣くから、それを見て笑っていたぞ。いや、羨ましがられた」

「さつきの光……」

思い当たるのは、先程の光だ。一番奥の部屋の人が、珠を渡しに来たということは、おそらくその人は……。

「そうじゃ。あの人は、きっともう天国に逝かれただろうなあ。感じのいい方だった。ただ名前をオトウと名乗っておったなあ。おかしな名前じゃ。呼んだら、オトウサンじゃ。おもしろいの。しかし、若そうじゃった。世の常の無情なことよ……。さて、そこでだ。あの人は、死ぬにはこの珠で過去へ行くのだが、誰かを一緒に連れていかなければいけないと言っていた。そして、過去に行くと、その数だけ珠が光を失い透明のボールになると」

「そんな……なんで！　なんで貰ったのよ……断れなかったの？」

どうにかして、祖父を死から切り離れたかった。その珠を壊せば済むのか。死なずに、誰かに渡せば終わらないのか。ただ、少しだけ過去に興味もあった。祖父の過去。しかし、たとえ一緒に見るとしても十年先でいいではないか。

「それは無理だ。これを知らない者は、ただ手渡されれば受け取ってしまう。言ったら断られるからのう。ただ、貰ったんじゃ。手にした途端に、おじいちゃんの体が物凄い光を放つてのう。自分が燃えているのかと思ったほどだよ。いや、本当に燃えていたのかもしれん。心臓の辺りから金色の線がぼんと生まれて、十個に分かれたんだ。そしてそれぞれが、この珠に入っていた。だから、今ある、この珠の光はおじいちゃんの思い出たちなんだ」

「ふうん。でもさ、それって捨てたりなくしたりしたら、どうなるのかな」

その珠が、生きているはずはない。言葉だつて分かるはずがない。それなのに、千春の

言葉を聞いたように、珠たちは光を増した。まるで警報を発するように。祖父が、それを

慰めるように掌で撫でる。と、袋の中身は途端に大人しくなる。捨てられるとも思つた

のだろうか。

そして、クツクツと含み笑いをしたかと思うと、祖父は言う。

「やはり、お前は私の孫だな。発想が同じらしい。おじいちゃんも、同じ事を聞いたよ。うっかり落としたらどうなるのかな。それはそれは、大変らしい。世の中に、幽霊つているだろう。まあ、信じるか信じないかは、後々お前が考えればいい。ただな、いるんじゃない。幽霊はな、この珠を無くした人達なんだと聞いた。珠を十個使い切り、次の人に引き継がないと、天国へは行けないんだ」

「え？　じゃあ、もし失くしたら、珠を探さなきゃいけないの？」

それはそれで、大変だ。幽霊がいるかは……、今はいい。千春は、まるで怪談のような話を順番に頭の中で整理した。とにかく、必ず使い切らなければ祖父は幽霊になってしまうのだ。

「それにな、この珠は使える時間が限られているのだ。それも半日、つまり十二時間だそうじゃ。だから、千春の所へ行く時間は省きたかった」

「ちよつと待つて。じゃあ、幽霊はずつと天国へ行けないってこと？　珠を使わなかった人がみんな幽霊になるの？　なんで使い切れなかったんだろう」

一つが整理整頓出来ないと、次には進めない。疑問を片づけなければ。

「理由は色々あるじやろう。おじいちゃんのように、知らない人いきなり貰つて嘘だと思ひ使わなかったかもしれん。一緒について来てくれる人がいなかったのかもしれん。もしくは、過去に留まり過ぎて、時間が足りなくなつたのかもしれん」

「おじいちゃんは、信じるの？」

祖父が死んでも困る。幽霊でも困る。その気落ちだけが右往左往する。しかし、祖父が信じると言ったその時には、従うしかないと思っただ。

「おじいちゃんは、いっぱい生きてきた。世の中は不思議なことばっかりだ。分かっておる。これもそのひとつに過ぎないのだよ。そのためには、付添人、つまりお前が必要なんだ」

信じる、ということだ。そして、暗に千春を説得している。

「付添人は何をするの？ どうして必要なの？」

「そうじゃな。きつと、生きた証というところだろうか。誰かに認めてもらうんじゃ。善いことも悪いことも。おそらく幽霊になったものは、付添人を探しておるんじゃないだろう。一緒に過去を見てもらいたいから、人に近づくんじゃあ。おじいちゃん、少しだけ分かる気がするのう」

祖父は、なぜ千春に過去を見て貰いたいと思うのだろうか。過去を見れば、生きた証が手に入れられるとでもいうのか。祖父の眼は決して生きることを諦めたものではなかった。むしろ、過去を見られることに希望を見いだしているようにも見える。

「そうなんだ。じゃあ、その珠は誰かにまたあげるんだ」

千春は、珠を使い切るときは祖父に二度と会えなくなる時だと分かっていたが、考えないようにした。今は、行くしかないようだ。それに、祖父の昔の姿を見られると思うと、心配よりも興奮が胸の中で渦巻いた。

「そうじゃのう。オトウサンは、この部屋に、遅くまで電気が点いていたから気になって入ってみたそうじゃ。そうしたら、お前を見ただ。きつと確実な付添人もいるだろうからって、安心したらしいぞ。当たり前じゃな」

「なにそれ……。じゃあもし……。もしも私が実家に戻っていたら、おじいちゃんは選ばれなかったかもしれないの……？」

千春は、シヨックだった。すぐ側で見守っているつもりが、死の

案内人になってしまったようなものだ。自分を責めると同時に、そんな理由で祖父を選んだ、オトウサンという人物に、明らかな怒りが湧いてきた。いまずぐ部屋に乗り込みたいくらいだ。変な名前のくせに、と口の中で小さく舌打ちする。

「千春。いいんじゃないよ。これで、いいんだ。オトウサンも最後まで迷っていたよ。でも時間も、もうなかったようだ。これもルールであり、運命なんだ」

「なにそれ！ おじいちゃん！ これはボランティアじゃないんだよ？ 仕事でもない。もっと自分を大切にしてよ」

千春は、姿なきオトウサンにぶつけられない怒りを祖父に放った。しかし、祖父は冷静でしかなかった。もう、全てを受け入れている。千春も、それ以上言うことなく、下を向いた。

「分かつとるよ。そんなこと、分かつておる。おじいちゃんは、充分自分のことを大切にしてきたんだ。いや、自分のことばかりだったかもしれない。色んなことがあった。だから、それを千春にも一緒に見てほしいんだ。そう思えるほど、充分に生きた。それとも、…このままじゃ、おじいちゃん幽霊じゃぞ？ 天国に行けん。千春はそれでもいいのか」

祖父は、千春の俯いた顔を、下から覗き込んだ。それが、決定打だった。

「いや。……おじいちゃん……は、あたしが助ける」

千春が強く発したのは、祖父が希望していた通りの言葉だった。

そして、それは予想通りだった。

「千春、ありがとう」

満足そうに頷いた祖父の顔に、涙はない。これから十二時間、戦いが始まる。祖父の中では、どこに行くべきかは決まっているのだ。それを千春は、受け入れられるのか。

「でもさ、おじいちゃん。その珠今度誰にあげるか決まっているの？」

「それは、まだだ。この病院で捜すかもしれんし、通りすがりかも

しれん」

祖父もここまで考えていなかったようだ。ベッドの上で腕を組み、先に決めておくべきかを悩み始めてしまった。少しの間うなり声を上げ、答えが出ないことに気が付いて溜め息を吐き言った。

「あげる相手はだれでもいいらしいんだ。よく交通事故とかあるだろう？ あれも、珠のせいらしいぞ」

「え！ そうなの？」

一緒になって考えていた千春はまた驚いた。もうなんでも受け入れる覚悟ではあったが、幽霊についてなど未知だ。

「そうじゃ。運悪く、通りすがりの靈感のある人間に珠を渡してもそれは死へと繋がるのだ。珠は、本人と付添人以外が触れると、効果が出てしまうからの。まあ受け取ることは必要だがな。とはいっても、病院で貰う人が一番多いらしいが。引き継ぐ珠を持った人はうじゃうじゃいるらしいからのう。死ななくても、珠を持ってしまったえば幽霊に見えるそうだ。貰ったからには死ななければならんが。厳密に言くと、幽霊予備軍とでもいうところかの」

「予備軍……。なんだか不思議だね。どうして珠なんて引き継がないといけないんだらう」

それは、無意識に口を出た千春の疑問だった。ほとんど何をすべきなのか、今の状況はどうなっているのか理解は出来ていた。納得も心の準備もまだだったが、しなければならぬ。

「難しいの。簡単に言えば、リレーなんだらうなあ。赤ちゃんだつて、母親から命のバトンを渡されるだらう。生まれてくるリレーがあるなら、死にもきつと引き継ぐ大切さがあるんだらう」

言われてみれば納得出来る話である。多くの人間にとって、自分が死ぬときに親がいるとはもう限らない。そうなると、親からバトンを貰うわけにはいかないのだ。千春は、自分が誰から、いつバトンを貰うのだらうかと今度は疑問に思った。そんなことも分かるはずがない。二人は、それぞれの想いを胸に抱いたまま、両手を握り合って黙っていた。出発の意志を確かめ合うように。が、その沈黙

を破ったのも、また祖父だった。まだ真夜中だが、時間は刻々と失われているのだ。

「それじゃあ行くとするか。どんと遅くなってしまう。早くしないと夜が明けるぞ。おじいちゃんは時間がないんだ。ああ、忙しい。忙しい」

冗談っぽく祖父が言う。

「よっし！　じゃあ行こう。このままでいいの？　あ、それが屋上行こうよ！　お家見えるよ！」

もう見られないかもしれない。一緒に歩いては帰れないかも知れない。それならば、千春は祖父ともう一度我が家を見たかった。きつとこれが最後だろうから。その気持ちを察してくれたのだろう、祖父の答えは了承だった。

「そうじゃの。場所は関係ないだろうし、荷物も珠だけだからな。お前も、身体は置いていくんだ。こうやってな。それ」

そう言うのと、祖父は両手を思い切り身体の前へ突き出した。と同時に、もう一人の祖父が身体から抜け出したのだ。ただ、身体が透けている。

「おじいちゃん……が、二人……」

千春の目が点になる。そして、自分も同じように両手を前に一気に突き出した。ただ、見様見真似だ。それなのに、あるうことが千春も身体を抜け出したのだ。

「うわああああっ」

自分のいた外見が、貧血を起こしたかのように床に倒れ込む。千春はそんな自分の身体を見て悲鳴を上げた。しかし、その声もどこか現実的でなく耳に何かが詰まっているような気がした。鼻を摘んだまま、勢いよく息を吐き出す。耳が、一瞬きーんと痛む。

「こらこら、大丈夫だから。止めなさい。これは、この珠のおかげで出来ているんだよ。ほら、身体を持ちなさい。布団に戻すぞ」

祖父は千春の身体の足を持ち上げている。慌てて自分の頭を両手で掴む。……意外と重いではないか。無事にそれを簡易ベッドに移

すと、祖父の身体も未だ規則的に心電図に記録されているのを確認する。二人は寝ている正明に目を遣ると、病室を後にした。病室には、一人の静かな寝息と空っぽの二人の身体だけが残っていた。

二人が廊下のエレベーター前まで来ると、前の部屋から声が聞こえてきた。苦しむような唸り声だ。千春は一刻も早く過去へ行き祖父を助けたかったが、祖父はその声を心配して、声のしたドアへ手をかけた。医者ではない。何を出来るというわけではないというのに。

「おじいちゃん！ 何をやっているの。やめなつて。時間ないんだよ」

むしろこれ以上余計なことに関わりたくない千春だったが、祖父は具合が悪いと心配だからと、ドアを開けて中に入っていく。仕方ないので、あからさまな溜め息を一つ吐くと千春もその後を追って部屋に入る。

「おじいちゃん……？ 大丈夫？」

案の定部屋の中は真っ暗だ。その中でぼんやりと人影が見える。

祖父はベッドの前にいるようだ。千春が恐る恐る声をかけると、祖父とは違う知らない声が返ってきた。

「お前……、誰だ。珠人^{たまにん}の他にもまだいるのか」

まさにベッドに寝ている病人だった。声と声の間に、痰が詰まったような音が鳴る。声からして祖父よりずっと若い、初老の男性のようだ。しかし、その声に勢いや張りは一切なかった。

「どうして、今日は……、二人も来るんだよ。俺はまだいらねえ……んだよ」

ベッドの脇に佇む祖父に向かって、男は憎らしげに呟く。この男にも心電図が付けられているが、それは祖父よりも幾分速かった。千春達の姿を見て興奮しているようだ。見える、ということはこの男の死期も近いのだろうか。

「あなた……知っているの？ 珠のことを知っているのね」

千春も祖父に近づく。すると、病人は怪訝な顔で千春を見つめ返

してきた。そして、弱々しく鼻で笑う。

「知っているも何も……。一時間くらい前にも、人のよさそうな男が来たばかりだよ。俺が唸っているのを聞いて、楽になれるとか上手いことだけ言いやがって。珠人だって名乗って、一通り説明していったよ。もちろん聞いたからには断つたし、あいつはすぐに引き下がったから安心したが……。まさか二人目とはツイてねえ。でも、お断りだぜ」

男は答えながら、珠だけをじつと見つめている。もしも祖父が無理矢理渡そうとしたならば、すぐに逃げられるようにしているのだろうか。この男のやせ細った身体に、そんな体力が残っているように見えなかったが、それでも人間最後の力を振り絞るかもしれない。「いや、安心しなさい。私は今から過去に行くところだ。この孫は付添人だ。全部聞いているなら分かるだろうがな」

祖父の言葉を聞きながら、千春はこの男の言っている珠人に思い当たった。

「おじいちゃん！ オトウサンだよ！ おじいちゃんところに来る前にここに来たんだ！ この人に話して貰ってくれなかったから、おじいちゃんにはすぐ渡したんだ」

鎮めた怒りがまた蘇ってきた。こんなに苦しんでいるなら、その人の言うとおり、珠を貰うべきなのに。

「千春、言っただじやろう。いいんだ。この人は元気そうじゃ。行く」

祖父が千春の背中を押して歩き始めると、後ろから病人が声をかけた。

「じいさん、あんた今日運ばれた人だろ？ その珠、最後は誰かにあげるらしいな。俺は確かにさっきの奴に詳しく聞いて断つた。でもな、他に断つた奴もいて、入院仲間のうちでは多少、珠の噂はあったんだよ。だから、それを知っている奴は結構いるんだよ。言っている意味、分かるか？」

男は、祖父が惚けているとも思っているのだろうか。あ？ と

聞き返すように言ったあと、更に馬鹿にしたような口調で続ける。

「つまり、じいさんみたいなよそ者が狙われるんだ。きつと、じいさんも渡す奴を探すのに苦労するぜ。一言いっとくぜ。よそ者を狙え。あとは子供だ。じゃなきゃ、幽霊になっちまうぞ」

アドバイスのようで、それは好意的なものとは正反對だった。祖父が、まるではずれのくじでも引いたとでも言いたいようだった。普通の人間は、珠を手渡されそうになると、ああなるのだろうか。未練がましく断り、まだまだ生きようとするのだろうか。珠を渡さなければ、相手が幽霊になってしまうと分かっている、相手をあざ笑うのだろうか。この男は、どうしてそんなにも生きたいのだろうか。千春は、落ち着きすぎている祖父の態度に、切なさはあるもののどこか潔さを感じた。任務を遂行するとかばかりに肝が据わっているのかっこいいではないか。少なくとも、この男と同じような行動を取らないことが誇りに思えた。祖父は、男の言葉に決して振り向くこともなく病室のドアを閉めた。

「あの人……最低」

病室からは、まだ咳き込む男の声が廊下まで聞こえてきた。ざまあみろ、とばかりに千春が吐き捨てるように言うと、祖父は静かに首を横に振った。

「あの人は、まだ若い。人生、色々だ」

納得がいかない顔をする千春の手を握ると、祖父はちょうど来たエレベーターに乗り込んだ。身体は透き通っている。それでもこんな乗り物に乗ったことに、千春は不思議な気分だった。これを、誰かに見られたら幽霊だと思われるのだろう。屋上につくと、生温い風が頬を通り抜けた。もう、夏が始まるうとしている。

「千春、じゃあ行こう」

祖父が、一つの珠を巾着から取り出しながら言った。袋の中から出てきたのは、まさに金色の珠だった。卓球に使用するものより少し大きく、しかし野球のボールほど大きくはない。そして、その中には液体が入っているように見えた。祖父が手の中でそれを転がす

と、中でそれが揺れるのだ。じつと見た後に、それが祖父の命を奪う元凶だとハッと気づく。気味の悪いそれに、背筋に震え走る。

「うん……。まずは、どこ？」

風に揺れる髪を両手でまとめながら、千春は聞いた。ポケットの中に偶々入れてあったゴムでひとつに結び上げる。気合いを入れるように、なるべく高い位置で。

「おじいちゃんがかわいい少年時代さ。会いたい人がいる」

「珠の使い方は？」

「珠人が念じることだと言っていた。二人の手を合わせて、珠を包んで念じると」

祖父は、手の平に金色の光る珠を乗せ、それを千春の方へと差し出した。そこへ自分の手を重ね合わせ、千春も頷いた。すると、突如目の前が白い靄に包まれていった。

5 母親

最初は何も見えなかった。目を開けているはずなのに、景色は何もない。目の前にいるはずの祖父の姿さえも見えない。白い靄は、やがて紫がかった霧へと変化していった。そしてそれはどこかお線香の香りも漂わせていた。ただ、千春は繋がれている感覚の残る祖父の手を離すまいと強く握りしめていた。付添人の仕事をする第一歩だ。祖父を信じるしかない。まるでこの手を離せば祖父だけが消え、一人で現実の世界に戻されるような気がした。だんだん霧が晴れてくると、千春の側にしっかりと祖父も立っていることに安心する。二人の前には、広い畑が広がっていた。どことなく懐かしい雰囲気があるのは、その畑の周りに建つ家の少なさと、家屋の様式だろう。今のようなマンションやアパートは視界に一切ない。畑の奥には何本もの柿の木が育ち、手の届かない高さの数個の実が出来ているようだ。畑にも、野菜が並んでいる。しかし、収穫も終わりかけなのだろう。一列に並んでいたろう野菜の半分はもう土だけしかない。野菜があつた場所には抜いたあとが分かるほどくつきりと穴が開いているところも少なくない。

「ここ、おじいちゃんちゃんの実家……？」

千春は、ぼんやりと辺りを見渡した。何度か来たことがあるここは、多少景色が変わってしまっても明らかだ。なにより、この畑とあの柿の木は今でもあるのだから。祖父が隣で頷いたのが分かる。

「何時だろう」

祖父の手をそつと離し、千春はキョロキョロしながら問い掛けた。この時代の人間にも、自分たちは幽霊として見えることもあるのだろうかと思いながら。

「時間通りなら、お昼くらいのはずだ。よし、おいで」

祖父は、そう言うと一緒に畑の中を突き進んで行ってしまう。こうなる前までは腰も曲がってきており、低い段差でさえ足を上げる

のを億劫そうにしていた。一回転ぶと後が長い、下手をしたら歩けなくなることだってあり得ると聞いていたので、千春はいつも祖父と歩くときは足下ばかりを確かめていた。何かあっても、すぐに自分が手を伸ばせるように。いつも緊張していた気がする。しかし、今は違った。あんなにもしつかりとした足取りで興奮したように楽しんで歩く祖父の後ろ姿など久しぶりに見た。それが少しだけ嬉しい。時間は戻らない。老いたら、若返ることなど出来ないはずだ。それなのに、今、祖父は明らかに鋭気を取り戻していた。

「おじいちゃん待って！」

千春は、その歩きにくい畑の土を踏みしめて祖父を追いかける。土の感触が確かに靴の底を押し上げる。それなのに、振り返ると自分の足跡はない。この時代の人間ではないことをまざまざと感じる。見なかった振りをして、千春は祖父に手を伸ばして腕を絡めた。体重をかけるように歩いたって、祖父はびくともしない。

「今は何年？」

「そうだなあ。多分昭和十年くらいのはずだな」

祖父は、急ぐように年寄りとは思えない力で千春を引っ張って行く。

「そんな昔かあ。すごいな、タイムマシンに乗ったみたいだ」

過去に帰ることなど二度とないかもしれない。出来るものならば、自転車に乗ってあちこちを冒険してみたかった。今の時代の建物は、おそらく大半はこの時代にはないだろう。恐らく、現代に帰った時に仕事に生かせるだろう。昭和時初期のコラムを書かせてくれるかもしれない、そう考えることなどもう職業病だ。何をしていてもネタを探してしまう。書かせて貰えたことは一度もないという難点を除けば、自分でも褒め称えたいほどの努力である。

「よし、見えたぞ」

気づけば畑から結構歩いていた。祖父の声に顔を上げると、一軒の家が見えた。

「あれ？ あの家、今あるおじいちゃんの実家と違うんだね」

「そうだよ。東京大空襲でこの家は焼けてしまったからね」

「あたしの家は、建て直したんだよね」

千春は、自分の生まれ育った家を思い浮かべた。友達の家から比べると、少しだけ古いがその分敷地も広いし風通しもいい方だ。

「おばあちゃんの家は焼けなかったからね。後で広くしたんだ。おじいちゃんが養子に入った時は、二階もなかったしな」

祖父は、祖母の家に養子でやって来た。千春の父親もそうだ。代々一人の女だけが生まれ、婿を取ってきた千春の家系に初めて男が生まれた。それが、千春の兄だ。家族中が大喜びだったようだが、この話は昔から千春を憂鬱な気分にした。じゃあ、千春はいらなかったじゃない、と。そんなことを考えていると、その家の中から男の子が飛び出してきた。玄関からではなく、庭に植えられた垣根の間から、無理矢理身体を引き出したという感じた。

「あ、あれ。おじいちゃんだ」

祖父が、冷めた口調で呟いた。一瞬目を見張った千春は、次に喉が裂けそうなほどの声で叫んだ。当然とはいえど、今とまるで違う少年だった。

「えー！ あれがおじいちゃん？ 悪ガキみたい！」

「懐かしいなあ」

千春の感想をよそに、祖父は目を細め、更に家に近づいて行く。

近所に家は数軒並んでいる。どこかの家の庭で落ち葉でも燃やしているのだろうか、きな臭さに混じってさつまいもの匂いが鼻をかすめた。思い切り息を吸うと、鼻の奥が風の冷たさで少しだけムズムズした。顔を上げてみれば、空には鰯雲が広がっていた。なにより、空が、広い。

「今日はおじいちゃんの十回目の誕生日なんだ。家の中へ入ろう」と、その時だった。

「こら！ 輝雄！ 並ばないとご飯がないからね！」

今度は少年が出てきた所とは別の、きちんと玄関から綺麗な女の人が出て来た。

「お前のひいおばあちゃんだ」

初めて見た、生きている曾祖母だった。二人で玄関から家の中へ入ると、すぐに小さな子供とすれ違ふ。見向きもせず走って行ったので、二人の姿は見えていないのだろう。

「やってるな。これが、おじいちゃんたちの毎日だった」

千春が部屋の中を見ると、大中小様々な子供たちが今は懐かしいちゃぶ台の前に、一列に並んでいた。その手には、お茶碗がしっかりと握られている。

「なにこれ！」

先程の綺麗な女性が、並びながら喧嘩をする子供達を叱りつけては茶碗にお米を盛っていく。その姿を見ながら、千春は周りを見回した。庭先から、また別の一人の男の子が茶碗を持ってやって来た。千春の前をすり抜け、列の一番前に割り込む。

「お母ちゃん！ 兄ちゃんがあ！」

すぐ後ろに並んでいた、まだ四歳くらいの女の子が兄の背中を叩きながら非難する。

「こらっ！ あんた、最後に行きなさい！」

「年上だからいいんだい！」

気の強そうな少年が、お茶碗をブンブン回しながら女の子の頭を殴った。突如、女の子の耳を劈くような泣き声が部屋中に響いた。周りに座って食べ始めていた子供達も立ち上がり、あちこちで喧嘩が始まる。一人が棚にぶつかれば、別の子供が叫び始める。あまりの騒々しさに、千春はその場にいるのも嫌になつてきた。女の子は泣き続け、列の後ろで順番を待っている子供たちも早くと急かす。輝雄少年は未だ姿を見せない。背中でも泣く赤ん坊を背負いながら、母親も呆れている。祖父は、十五人兄弟の真ん中だ。

「おじいちゃん、何していたの？」

千春は、祖父の耳元に口を寄せて叫んだ。そして、自分の両耳を半分以上両手で覆う。

「誕生日はな、特別なんだよ」

祖父は相変わらず落ち着いていて、懐かしそうにその光景を眺め続けていた。千春にとっては騒音でしかなくとも、祖父からすれば当たり前前の光景だったのだ。幼い頃の兄弟と再会したかったのだろうか……。

「おじいちゃん、どうしてここに来たかったの？」

「この後だ。この後」

母親は、騒ぐ子供達をものともせずにお茶碗にご飯をよそっている。自分のお椀が一杯になれば、することは一つである。泣いている時間など勿体ない。その後は、ガツガツという、ご飯を口に運ぶ音が聞こえそうなくらい、全員が一気にかき込んだ。おかずは梅干しだけだ。まるで、テレビのアニメでも見ているような昔の光景だった。そして、輝雄少年がその間、戻ることはなかった。子供達が食事を終えて外へ飛び出して行ってしまうと、部屋は妙に広く感じた。その隅に二人が座ってしばらく待っていると、玄関からひたひたと忍び足で歩く音が近づいてきた。隣の仏間からは、お線香の香りがしてくる。

「おじいちゃん！ 来たよ」

千春は、狙っていた獲物をつり上げたように驚き立ち上がると思ったが、十分少々の正座のおかげで完全に足が痺れてしまった。瞬時に下半身に電流が流れたように痛み、力が入らない。せつかく透明なのだから痛みなんて感じなくなればいいのに、と思いつながら手を伸ばして両足をさする。

「分かってる。おじいちゃんだ」

祖父はゆっくり立ち上がると、台所で仕事をしている母親に目を向けた。その眼差しは、いつも祖父が千春を見る目付きとはまるで違っていた。穏やかで、微笑んでいるような。それでいて少し文句を言いたそうに。母親の背中にいる赤ん坊も眠ってしまったようだ。大人しくて首が肩からはみ出すようにして傾いている。おんぶ紐は使い古されていて、決して綺麗とは言いがたい。それでも何度も何度も洗われているという洗練さがあった。千春と祖父の位置からは両

者が見える。輝雄少年は、廊下から母親の様子を伺っている。台所の入り口にあるお米の樽を、こっそり開けたが中身は何にも残っていない。輝雄少年が諦

めて再び外へ飛び出そうとした時だった。

「輝雄、待ちなさい。おにぎりにおいたから。食べなさい」

曾祖母は、振り返ることなく言った。輝雄少年が驚き、母親の方を振り向いた。

「お母ちゃん、気づいていたのか」

「玄関を入った時点だね。さあ、これ。きちんと向こうで座っておあがんなさい」

そう言い振り返った曾祖母は、お皿に乗った三個のおにぎりを持っていた。気まずいのか、下を向いたまま輝雄少年は居間へ入った。そして、座った途端にかぶりつく。

「どうね。おいしいか？」

無言で首を大きく縦に振った息子を細目で見ると、彼女は続ける。「輝雄。あんただけを他の兄弟より優先することは出来ないんだよ。お前には、いつも下の子達の面倒も見て貰っているから、有り難く思っているんだよ。このご飯は皆より多めにつて、最初からお母ちゃんあげるつもりだったんだ。お前が生まれた日なんだから。生まれてきてくれてありがとう。お前がいてくれるだけで、お母ちゃん幸せだよ」

輝雄少年は、初めて聞くその言葉に母親の顔を見つめた。いつもは兄弟で溢れ返っているこの居間と母親を、今は独り占めしていることに気づく。

「お母ちゃん」

それで精一杯だった。そして、今しかなかった。

「輝雄。お母ちゃんと昼寝しよう」

そう言つと、背中 of 赤ん坊を床に下ろす。

「本当？」

その嬉しそうな声が、少年の口から発せられた時だ。千春の腕を

祖父が引いたのだ。

「行くぞ」

祖父は、もう母親を見てはいなかった。

「おじいちゃん。あれからお昼寝したの？」

「そうだよ。夕方までしていたら、帰ってきた兄弟に笑われたさ」

「でも、おじいちゃん幸せそうだった」

「あの日の事は一度も忘れなかったんだよ。あの言葉がまた聞けてよかった。ただ、子供の記憶とは幾分違うような気もするがな。お前の曾祖母、綺麗だろう」

「うん。あたしも会ってみたかったな……」

「今、会ったじゃないか。千春も、あの姿を忘れないでくれ。さて、手を乗せるんだ」

祖父の差し出した手に、千春はそつと自分の手を重ねた。また、周りを靄が包む。

6 戦友

祖父と千春が、次なる場所で巾着を開くと、袋の中に透明に変化した珠が一つあった。あの金色の液体は消えている。思いでの消化、まさに残るは容器だけだ。手で触れたら簡単に割れてしまいそうなほどそれは弱々しく見えた。

「千春！ 動くな！」

次は何が起こるのかという興奮から、千春すぐに手を離して走り出そうとした時だった。背中から祖父の怒鳴り声が追いかけてきた。咄嗟に頭に両手を乗せて庇う。緊迫した張りつめるような空気に、背後を振り返る。どうやら何事もないようだ。千春に向かって手招きしているのを見ても、勝手に動き回るなということらしい。

「おじいちゃん、ここ、どこ？」

千春が祖父の隣へ戻り、辺りを見回すがジャングルといっても間違いないほどの森に囲まれている。さっきまでは秋だったはずなのに、今ではじつとりと肌を湿らすほどの気温が感じられる。すっと一筋の汗が千春の耳元を流れた時、祖父が重い口を開いた。

「ここはな……。フィリピンさ、昭和二十年のだ……」

昭和二十年……千春の脳裏にその年号で思い出すことは一つだ。歴史の授業で習い、忘れることもない。終戦の年。二人の間に流れた沈黙も、長くは続かなかった。鼓膜の破れそうな破裂音が空気を切り裂いたのだ。右へ行つたかと思えばそれは左に移る。それが銃声だと分かるまでにしばらくかかった。分かった途端にはパニックに陥り悲鳴を上げた。どこへ行けば安全かも把握出来ないのに、身体の中心部がここにいることを拒絶する。

「千春！ 落ち着け！」

祖父は、遮二無二千春の手を離すまいと腕を握った。両足で踏ん張って、銃声に負けない声を張り上げる。

「千春！ 戦争は終わっているんだ！ それに、この姿は見えない

！

そうだ、姿は見えないんだ。我に返ってみれば、それを聞かされるのはこの数時間で何回目だろうと思った。いや、それならばなぜ発砲音がするんだろう。冷静に考えられる一方でパニックは止まらない。安全かも知れない。でも、そんなこと言い切れないじゃないか。両腕には鳥肌が立ち、微かに全体が震える。その様子を察すると、祖父は落ち着いた声で言った。

「千春、移動することで珠の効果はもう使った。もう次へ行こうか」それは、責めるようでも諦めたような口調でもなかった。一瞬その言葉に甘えなくなる。もしかしたら生々しいものまで見るかもしれない。これは怖い。しかし、祖父がこの世に思いを残すのも可哀相だ。

「おじいちゃん、大丈夫だよ。ちょっと怖いけど、平気。どうしておじいちゃんがここに来たかったのか、あたし知りたい。それに……」

おじいちゃんともっと一緒にいたいんだ、という言葉は言わずに飲み込んだ。

「よし。じゃあ見に行こう」

「おじいちゃん、誰を見に来たの？」

この恐怖に耐えるための作戦だ。話してれば、恐怖も少しは和らぐと思った。

「ここフィリピンは、昭和二十年の十月だ。戦争が終わったのが八月だから、二ヶ月後くらいだ。おじいちゃんは、医療班としてここに来ていたんだ。人を殺す事はなかったが、色んな嫌なものも見だし、汚いこともした。あまり思い出したくはないな」

二人は手を繋いで歩きながら、森の中を抜けていく。獣道とでもいうような、道とは到底言えない。脇から虎でも襲いかかってくるのではないかと、千春は話を聞きながらも辺りを観察してしまう。

「でも、戦争が終わったのにまだフィリピンにいるの？」

「千春。戦争が終わっても、すぐに皆は日本へ帰れなかったんだ。」

大体は捕虜になって、アメリカ人の家で召使のように働いた。そして、日本に戻る順番を待ったんだ。今から、おじいちゃんが仲間と住んでいた小屋、そして働いていたアメリカ人の家に行くつもりだ」

祖父は一度目と同様、誰かに会いに来たはずだ。しかし、こんな苦しい時代に会いたい人などいるのだろうか。祖父自身も思い出したくないと言っているのに。

「分かった。でも、召使いなんて最低だね」

「そうだな……しかし、今の時代にだって他の国にはそういうことはたくさんあるんだ。日本にだって目立たないところでは差別だつてたくさんある。この時代ならば、当然だった。戦争に負けるとはそういうことなんだよ。なんの価値もなかった。残った者を襲うのは、悔しさと悲しみだけだ。ただ、召使いと言っても掃除や洗濯をする訳ではない。薪を割ったり、買出しに行ったりしたんだ。おじいちゃん、一年程で日本に帰れたが、それまではずっと働いていた。ご飯を貰えるだけ有り難かったよ。たとえ日本に居ても腹一杯食べられたわけではないからな。ただ、そう思わない奴もいた」

「どうして？」

「日本が負けた事実を受け入れられなかったんだ。それに、タダで働くことも辛いものだ」

「タダで！ 毎日？」

千春にはその事実こそが信じられなかった。働けば見返りを求めて当然だ。悲鳴に近い声を上げると祖父は悲しそうに微笑んだ。

「それが捕虜なんだ。殺されたくなければ働かなくてはならない。だが、この頃には日本の兵隊なんて、国にとっては大事でも何でもなかったから、食料が送られてくることもなかった。だから、私なんて、積極的にアメリカ人の家に行きたかった。たとえ切れ端でも、肉などが食べられた」

「なにそれ……。」

当たり前のように食べている肉を思い出し、千春は少しだけ空腹

を感じた。でこぼこの地面や草木を足で踏み潰しながら、懸命に歩いた。地雷でも踏んで吹き飛ばされたら……と考え、それこそを吹き飛ばすように顔を左右に振った。そして考える。祖父は、ここで何を感じていたのかと。必死で生きたくて、捕虜となった。その祖父のおかげで自分が生きている。そして、今祖父は死のうとしている。千春も大学を出て、出版社に入った。戦争については学んできた。西暦何年の何月何日どこに原爆が落ちたかも覚えていて。どんな条約が結ばれ、どこの国がどの領土を侵略したかは頭に叩き込まれている。しかし、実際にそこで戦った人たちの気持ちや、行動を考えたこともなかった。いや、皆そうなのかもしれない。歴史とは、過ぎてしまえば、過去のことである。知識として必要なものであり、道徳では滅多に使用されない。そして、無情なことに知らなくても生きていけるのである。知ろうとするか、しないかの違いだ。そして、千春は今まで知ろうとはしなかったのだ。

戦争を体験した人は、まだこの世にたくさん生きているのに、なぜかとてつもなく昔の出来事のように感じてしまう。自分の知らない過去であれば、それは、縄文時代も、江戸時代も、戦時中も同じラインでしかなかった。

「千春もそう思うのかい？」

ふと聞こえた祖父の声に、我に返る。何を聞かれているのか分らなかった。

「え？ なにが？」

「おじいちゃんは、アメリカ人に使われて悔しくなかったと思うかい？ 千春は、ここで使われるくらいなら死んだ方がいいって思うかい？」

祖父が立ち止まったことで顔を上げると、今まで森だった景色が開けていた。少し先に小さな小屋がある。目的地に着いたというのに祖父は動こうとしない。

「え？……分らないけど、なんとなく。ごめんなさい、変なこと言って」

千春の答えは出ない。口からすぐに謝罪の言葉が出るが何か間違ったことをしたかと言われればそれも違うだろう。祖父もそれが分かったように頷いた。

「いや、いいんだ。考え方はそれぞれだ。おいで、仲間を紹介しよう」

この短い時間で、何か考えが変わるだろうか。祖父の背中を見ながらただ歩く。

「ここだよ」

小屋の扉の前に来ると、甘い果物の匂いがした。思わず感動した声が漏れる。小屋の扉は開きっぱなしだ。

「いい匂い……」

「ジャングルに入れば果物は採れるからな。反対に、それしかないんだ。おお、あそこに

寝ているのが、おじいちゃんの戦友の山本だ」

祖父が指差した方には、体中に怪我を負って寝ている男がいた。部屋は一つだけだ。布団や荷物もあちこちに散乱している。寝ている男性以外にも部屋には数人がいたが、多少やせ細ってはいるものの怪我はしていないようだ。浅黒い肌に、すり切れた服を身につけている。

「山本さん……？ 初めて聞くね。あの怪我は、戦争で？」

当たり前の質問といっても間違いはなかった。しかし、戦争で殴られたような傷が出来るだろうかと疑問にも思う。戦争なら銃で怪我をするものではないか。

「今、おじいちゃんは働きに行っている。山本は、おじいちゃんと違って召使なんてするより死んだ方がマシだと毎日言っていた。あの怪我は戦争の後出来たものだ」

二人が部屋の隅から山本を見てみると、しばらくして彼ら起きて網靴を履いた。何も持たずに外へ出ていく。彼に目を向ける者さえいない。彼がすれ違う瞬間、千春は一瞬目があつたような気がしたが、祖父は何も言わなかった。

「追いかけてよう、千春」

「おじいちゃん。もしかして、今度は山本さんに会いにきたの？」

紹介すると言ったのに、名前を覚えてくれたのはあの男だけだ。顔色も人相も悪い、あのけが人だけ。山本は、怪我のせいで歩くペーが極端に遅い。服で隠れている場所にも怪我を負っているようで、たまに左の腹が引きつるように歩く。これではろくに働けないのではと、他人ながら心配になる。

「そうだ。山本は大事な仲間だった。あいつは九州だった。おじいちゃんは、子供が多い家だったから、ろくに勉強なんて出来なかった。しかし、山本の家は医者でな。頭がよかったんだ。知らない話をたくさんしてくれた。山本の話聞くのはとても楽しかったし、夢をもらえた。医療班の中でも、技量が頼りになった」

「それなのに、自分の怪我は気にしないの？」

「山本は、右足を引きずっているだろう。あれは、銃で撃たれたんだ」

身体を引きつるようにしていたのは、腹ではなく足が痛いのか。そして、心の片隅ではそんなこともあるだろうと受け入れている。医療班でも撃たれるのか……。

「山本は、数多くの命を救った。どこにいても危険と隣り合わせだからね。でもな、私たちは、日本が敗北宣言を出す前から捕虜になったんだ」

敗北宣言の前……。白旗を揚げたということか。

「そうするとどうなるの？」

祖父は、真っ直ぐに山本の背中を見つめながら言った。生ぬるい風がまた頬を撫でる。

「医療班、特に力のある山本は、敵兵の命も救わなければならなかった。それが山本には屈辱以外のなにものでもなかったんだろうな。ある日、敵兵同士が銃で喧嘩してな。馬鹿馬鹿しいが、そんなことも結構あったんだよ。その手当てをしろと言われた。おじいちゃんも山本の側にいた。でも、何も言えなかった」

「山本さん、どうしたの？」

「山本は、すぐに拒否したさ。日本兵の命だつて戦争でたくさん亡くした。敵の、しかも喧嘩で捨てる命なんてクソくらえだと言つてな」

それがあの代償か。

「喧嘩なんてする奴だから、気が荒くてな。すぐにあいつは銃で撃たれた。しかし、医者腕は確かだから殺すわけにはいかなかったんだ。おじいちゃんは何もしなかった」

もう一度祖父は、繰り返す。ここへ来たのは、その後悔か。だが、その行動は仕方ないではないか。

「おじいちゃん、当たり前だよ。怖いし……それに、自分も撃たれるかもしれない」

そう言つてから、千春は虚しくなつた。所詮、自分も人のことを考えられない人間なのだろうか。そして、祖父を慰める言葉を言うことが出来ない自分に。

しばらく歩くと、今度は三人の前に一軒の広い屋敷が現れた。日本兵の小屋のあつた場所とは全く違い、門の辺りには花壇がありよく手入れされているようだ。耕された土には野菜が育っていて、ニワトリが数羽遊んでいる。その中を突っ切り、山本は一人の男に近づく。それが誰かは、千春には山本の言葉で分かつた。

「おい。今日もそんなことをやっているのか。輝雄。お前は何をしにここへやってきたんだ。土をいじりにきたのか？」

喧嘩節でいう山本に、輝男青年は一度顔を上げたかと思うとすぐに作業に戻つた。あの子供の姿ではない。成長した、少し痩せているが大人の祖父だつた。だが、今と顔つきは全く違う。目はどんよりとしていて、山本を面倒くさそうにあしらつた。千春の隣にいる祖父が溜め息を吐いた。

「山本、嫌なら来なければいいだろう。俺は、やらなければいけないと思つたことをやっているまでだ。文句や意見は帰ったら聞く。大人しく待つていてくれ」

しかし、山本は諦めない。痛む右足を折って土に座ると、輝男の肩に手を置く。

「だけど、虚しいじゃないか」

その声は、隠そうとはしていなかった。意見が食い違う二人。ここで殴り合いの喧嘩になったらどうしようと、隣に立つ祖父を見上げたが、祖父は二人を落ち着いて見ていた。その時である。勢いよく屋敷の扉が開くと同時に、真っ黒な大型犬が飛び出してきたのだ。そして、その後を銃を構えた男が走ってきた。なにやら英語を早口で山本に向かって怒鳴っている。

「何て言っているんだろ。早くて聞き取れない……」

千春が怯えて言う、祖父は千春を自分の後ろに隠した。何か汚いものから守るように。

「聞くんじゃない。とても汚い言葉で山本を侮辱しているんだ。敵人の間では、山本の頑固さは有名だったからね。今思うと、あいつがまともだったのかもしれない」

しばらくすると、犬のうなり声とともに主人の罵倒も止んだ。輝雄青年は、山本に見向きもせず、再び草を耒る。山本は、それを一瞥すると、小屋の方へと引き返し始めた。

祖父は、無言で千春の手を引いた。さらに真剣な顔で、山本を追いかける。これからなにが待っているのか。祖父の顔は苦渋に満ち、眉間に皺が寄っていた。ただでさえ年寄りなのに、もう顔はくしゃくしゃだった。それが泣くのを我慢しているようにも見え、よく見られない。数分歩いていると、背後から誰かが近づいてくる足音があった。祖父も気がついたようで、同時に後ろを振り返る。その顔には、驚きよりも確信があった。誰かが追ってくるのを待っていたらしい。その人物は、先程の家の主人だった。祖父は脇に立つ木の陰に身を隠して様子を窺っている。千春は慌ててその後を追う。

「なんでお前がついて来るんだ、くそやろ」

山本が、振り返るとすぐ日本語で言った。主人は何を言われたかは分からなくとも、馬鹿にされているとは思ったのか顔をしかめた。

そして、次の瞬間だった。胸元にあつた銃を取り出すと、目にも止まらぬ速さで山本に向けて撃つたのだ。それは、足ではない。心臓に向けてだ。山本は、一瞬呆然とした顔を作った後、自分の左胸にゆっくりと視線を向ける。一筋の血が流れ出ている。視線を主人に戻したものの、すぐに胸を押さえ、地面に倒れ込んだ。主人は、山本がどうなるうと関係ないのだ。振り返ることなくすぐに消えていく。慌てる様子も、後悔もないようだ。堂々とした足取りだった。主人が消えると、すぐに祖父と千春は陰から出て山本に駆け寄る。すると、山本は焦点を失いかけた目で千春に言ったのだ。

「お前、誰や。小屋にもおつたな。成仏せえや」

山本の声が、空を切る。その声は、迷いのない真っ直ぐな声だった。

「え？ 山本さん。あたしが見えるんですか？」

驚いて辺りを見回すが、千春達以外には誰もいない。

「俺は霊感強いんや。お前ら、幽霊やろ」

山本の胸からは益々出血が広がり、顔も青白く変化していく。この蒸し暑いジャングルの中で冷や汗を額に浮かべるのは死を意味しているのだろう。

「え、あたしは……。おじいちゃん！」

祖父は、千春に声を掛けられたものの、ただ立ちつくしている。

そして、口を開いたその言葉に同様は感じられない。ただ、地面に横たわる山本を見下ろす。撃たれた山本でさえも、落ち着いているのだ。

「そういうことだったのか。お前を撃つたのは……。あの主人だったのか」

「お前、目が輝雄に似とるな。死んだんか……」

山本は目を細めて静かに笑っていた。二人で未来から来たと言って、信じてくれるだろうか。千春が、励ますように祖父の肩に手を置く。

「まだ死んでない……。でも、死ぬ前に俺は謝りたかったんだ……」

ずっと、ずっとな。俺がもつとお前の話を聞いていればこんなことには。俺はいつもお前に教えてもらうばかりだった。側で見ていただけだ……」

泣くわけでもない。声を荒げるわけでもない。それは静かな謝罪だった。祖父が名前を名乗ってもいないのに、二人の間には何か通ずるものがあつた。甲高い鳥の鳴き声が一声森に響いた。それに答えるように風で木々が揺れる。

「俺は、これで良かった。気にしないでいい」

山本の身体から力が抜けた。開いたままの目を、祖父がゆっくりと閉じさせた。千春はそんな祖父の側にいることしが出来なかった。むしろ、もつと感情を出してくれば声もかけられただろう。しかしそうではない。信用されていないのか、子供扱いされているのか。感情を分けて貰えない事実が心を締め付ける。隣にいる意味が分からなくなる。

「行こう」

「え、おじいちゃん。山本さん、このままでいいの……？」

息絶えた山本が、祖父のように光に包まれることはない。このまま置いていけというのか。

「大丈夫だ。あと何時間かすると、おじいちゃんが発見するんだ。当時、何があつたのか分からずに必死で連れ帰ったよ。あいつは現地で邪魔者扱いされる時は多かつたからな。でも、謎はとけた。もういいんだ」

祖父は、後悔しているのではないのだと漠然と感じた。確かに、祖父は謝った。しかし、それは自分が許されて楽になりたいからではない。過去を消化したいのだ。おそらく、あの山本の言葉を聞くのがいくら早くても、祖父は自分を責め続けただろう。幸福だろうと、不幸だろうと、祖父はすでに全てを受け入れているのだ。だから、涙を見せなかった。もう泣けないのかもしれない。そして、人間は強くなっていく。泣くことが弱いことではない。しかし、泣かない祖父は強かった。

「でも、山本さんって靈感が強かったんだね。あたし、小屋で最初に目が合った気がしたけど、勘違いじゃなかったんだ」

千春が、巾着の中を探る祖父に言うと、その答えは簡単なものだった。

「そうだ。当時は死んだ仲間や大佐が周りをうろついていると言ってたな。冗談かと思っていたが。まさかあんなにはつきりと見えるとは」

祖父の思いがどれほど消化出来たのかは分からない。だが、この過去も見て良かった……そう思えた。もう、立ち止まらない。

「よっし。次はどこだろう」

それを聞いた祖父は、少しだけ意地悪く笑うと、千春の手の上に珠を合わせた。

7 結婚

白い靄が現れたかと思うとあつという間に次の場所へと到着したようだった。足の裏に確かに地面の感触がある。しかし、三度目となってもどこに自分がいるか分からないことほど不安になるものもない。千春が祖父の手をぎゅっと握ると、その心を安心させるかのように靄が晴れていく。そして、目の前には懐かしい家が見えたのだ。

「あつれえ……」

しかし、疑問の声が漏れる。その家は、千春の実家と似ているが外観が一回り小さいのだ。家と祖父の顔の両方を、交互に見る。祖父が静かに頷き、手を離れた。

「そうだよ。今は、戦争が終わっておじいちゃんが、おばあちゃんのところへお嬢さんに来る頃だ。あれから三年ほどが経っているかな。立て直す前の家だ」

再び、祖父は懐かしそうな顔をしていた。一人で思い出に耽っていて悔しくなる。

「おじいさん、お家を探索してもいいでしょうか」

今度は安全な場所に間違いない。膝を折るようにして顔を覗き込むと、祖父が笑って頷いた。千春は小さくかけ声をかけ、家に向かって五十メートル走のように駆け足でスタートした。畑を回り、家の庭を突っ切る。玄関の方からは、低い犬の鳴き声が聞こえた。母親から、昔飼っていた犬の話はよく聞いていた。どこにいたのかと探そうとした時だった。転がる勢いで二人の女性が家から飛び出してきたのだ。丁度、千春の顔の数センチ前にいきなり玄関のドアが開いたので、鼻の頭をぶつけそうになって尻餅をついてしまう。痛みはないものの、小さい声で言い合いを始める二人に開いた口が塞がらない。すぐ側にいた犬までが、さらに泣き声を大きくする。尻餅を付いて二人を見上げる千春の脇に、祖父がやっと思いつく。

「おじいちゃん……この二人」

女性は綺麗な着物を着ていた。終戦後はモンペ姿を想像していたが、三年はそれなりの年月になるようだ。玄関脇には野菜が積まれている。

「若い方がおばあちゃんだ」

「うん。昔から、頬がぷっくりしているね」

太っている訳ではない。しかし、頬にあめ玉でも入れているかに膨らんでいるのだ。笑うと顔がまん丸になる。祖父が、頷く。千春達とは正反対の雰囲気の二人は、そんな二人には気づかない。

「私は嫌です」

祖母の発した声だった。今よりも張りがあり声高だが、間違えようがない。と、いきなり祖父が笑い出した。それは、爆弾が爆発したかと思うほどの豪快さだ。ぎよつとして千春が祖父を見上げると、額に手を当てている。ひとしきり一人で笑った後、祖父が言った。

「やつぱりな。千春、おばあちゃんは、おじいちゃんと結婚するのが嫌だったんだよ」

見合いだとは聞いていた。しかし、祖母がここまで嫌がっているのが祖父との結婚だとは少なからず衝撃だった。思わずその勢いで立ち上がる。祖父は未だに笑っているが、自嘲なのか嫌味なのかは不明だ。しかし、こんなに楽しそうにしている祖父を最後にいつ見たらだろうか。少年時代や青年時代を見て若返ったのかもしれない。五体全てが健康そのままである。笑った顔も、とても魅力的だ。

「嫌です。私は、知らない人とは結婚しません。それにお母さん、私は長女じゃないんですよ。家を継ぐのはお姉さんのはずです」

祖母は、母親の着物の袖を掴んで懸命に訴えている。そんな祖母の目を見ると、千春まで緊張した。その必死さが、孫から見ても色っぽくて齒がゆい。その気持ちを押し隠そうと、祖父の顔を見つめる。

「この日は、おじいちゃんとおばあちゃんの、お見合いの日だったんだ。見合いといっても昔はすぐ結婚。自分たちではどうしようも

なかった。親の決めた縁談でな。おばあちゃんは、最初口を利いてくれなかった」

言い合いは収まりそうもない。祖父は、少しだけ微笑むと、一人で家の中に入って行く。千春は、付いていくべきかと足を動かしたが、祖母の肌の細やかさに目を奪われ立ち止まった。祖母は、昔は輪切りのきゆうりで顔のパックをしたという。昨日の夜もしたのでろうか。肌がすべすべだ。いや、これだけ嫌がっているのだからしているわけがない。千春も、自分の肌には自信がある。祖母譲りの丸顔は嫌いだ、今は正明が全てを褒めてくれる。十分である。千春は、祖母の顔の前に自分の顔を持っていった。

「こう見ると、今のあたしに似ているかも……」

小声で呟き、まじまじと顔を凝視する。まだほとんどない皺が数えられそう。思わず右手でそつと祖母の顔に触れてしまってから我に返る。すぐに引つ込めると、祖母は気づかないようだ。少しだけ顔をしかめたが、すぐに目の前の的に向き合った。

「お母さん、とにかく嫌です」

「あなたは！ とにかく失礼のないように、大人しくしているんですよ」

言い合いは平行線を辿ったが、千春にとっては問題ではなかった。どう足掻いても祖父母は結婚することになるのだ。千春は二人を一瞥すると、祖父を探しに玄関の中へ入っていった。

「おじいちゃん。どこにいるのー」

家全体に聞こえるほどの声で叫びながら、廊下を歩く。間取りも今の家とは少し違う。なによりこの家は二階もない。玄関から一番近いドアを開けると、そこは風呂になっている。しかし、湯船が小さい。というよりも、初めて見る五右衛門風呂だ。室内に入ると、外から燃やす仕組みになっているようだ。恐る恐る片足から風呂に入る。湯も入っていないが、意外と深さがあることに驚き、その中に座り込んだ。この風呂で、祖父母は家族になったのだ。同じ風呂を使い、同じ食事を分け合い、同じ布団で寝た。ぼんやりとその時

間の長さを想像する。天井を見上げると、シミ一つない。祖母が綺麗好きの所以もここが発祥だろう。ふと、千春の視界を遮る者が現れた。

「あ、おじいちゃん。どこにいたの？ 探していたんだから」

「すまん。少し懐かしくてな。それに和室にごちそうが並んでいるから、目を奪われてしまったよ」

「あたしも見たい！……食べられないよね……？」

思い返せば、ほとんど何も食べていない。行く場所には必ずおいしそうな食べ物。意外と殺生だ。風呂釜から出た後、つるりと滑りかけたのも空腹の証拠かもしれない。廊下を抜けると、たちまち食欲をそそる匂いがした。十六畳はあろうかという和室にテーブルが並べられている。その上にはテーブルに載った料理が置かれ、人が囲うように座っている。それは七五三のお祝いの席で見ようなきちゃんとしたものだった。

「すつこい……」

料理よりも、息を呑むほどの緊張感がある。料理が綺麗に列を乱さずに座っていることも圧迫感がある。

「この時は、本当に怖くてな。この人たちを見て、すぐに帰ってしまおうと思ったよ。この中で、まだ生きているのはもう少ない……」

祖父は、今までのどこよりも注意が散漫だった。色んな人の顔を覗き込んで感想を述べている。こいつは若い。こいつは昔からハゲだ。一通り気が済んだところで千春が座っている桐の箆笥の前に戻ってきた。雰囲気は押されて正座になる。揉めていた二人も上座に腰掛け祖父の登場を待っているようだ。誰もが酒や食事に手を付けるわけでもなく、ただ重苦しい沈黙が流れる。その時、一人の男が部屋に入ってきたのだ。両脇には恰幅のいい男性を二人従えている。

「あつ！」

思わず漏れた叫びとともに、祖父の袖を引っ張る。輝雄青年が、袴姿で登場したのである。フィリピンにいたときよりも、多少体格

がよくなっているようだ。ただ、色の黒さに変化はない。

「あの時は緊張していてな。顔が強張っているだろう。全く覚えていないんだよ。両脇は兄弟だ」

祖父の言葉は事実のようで、戦争の時はかけていなかった眼鏡が鼻の頭にずり落ちている。決してかつこいいという風貌ではないが、千春から見ても誠実そうだ。綺麗に剃られた髭と整えられた短髪。「では、皆さん。どうぞご着席ください」

祖母の父親が、輝男青年を見届けると言った。そのまま、客の間を通ってきた祖父の手足は左右同じに動いている。祖父母が並んで座り、その両脇に両親が座る。次々と酒を注ぐ者が現れ挨拶を交わす。しかし、当の本人達はお互い視線を合わせることもない。

「何を話せばいいのかも分からないしなあ。おばあちゃんは、どうも機嫌が悪かった」

呟くように言った祖父は、鼻の頭を軽く掻いた。今でも祖母の機嫌に振り回されているのは、この時から始まっていたのか。

「私、嫌ですから」

食事が終了間近になった頃、祖母が初めて言葉を発した。それも鋭い声だ。それはため込まれていたもので、封を切ってしまうば早い。一気に注がれる周囲の視線も気にせず、祖母は真っ直ぐに一点を見つめていた。

「どうして私なんでしょう。だって、私は長女じゃないわ。それに、知らないです」

一息に言つと、着物に気を使いつつもすばやく立ち上がる。

「文子、座りなさい」

祖母の母親は、祖母を宥めるわけではなく諭すように言う。先程の話は終わりを迎えなかったようだ。祖父は呆然と祖母の横顔を見上げている。何かを言おうとしているのか唇が微かに動いたが、言葉は出てこない。千春にはこの小さな修羅場が、コメディにさえ思えた。

「嫌です。あんなの理由にはなっていないません」

「いいえ。納得していただきます。お姉さんは、もうお相手があります。でも、あちらの事情で嫁いでしまうのですよ。我が家の誰かに養子をとって、継いでいただかなくてはならないんです。これは変わりません」

和やかな場の空気が、一気に冷たいものへと変わる。その空気に耐えられない祖母はとうとう部屋を飛び出していった。

「いや、まったく申し訳ありません」

祖母の父親が、頭を下げる。他の者の食事に伸ばされていた手が一瞬で止まった。破談になるのか、恐らく誰もがそう思っただろう。しかし、最初に声を発したのは輝男青年だったのだ。

「ちよつと見て来ます」

箸を置くと、さつと立ち上がり部屋を後にする。その背中とはとても大きく見える。千春と祖父が追いかけると、なにやら裏の畑から声が聞こえた。

「……でしょ」

祖母の声だ。

「おじいちゃん、あっちだよ」

隣の祖父を見ると、子供のように下唇を突き出して動きなくなさそうである。具合が悪いのかと一瞬不安が過ぎる。しかし、そうではないようだ。

「お前、ここで待っていないか」

この後の場面を知っているからこそ、照れ隠しか。

「おじいちゃん！ 何を言っているのよ。一緒に見に来たんでしょ」
半ば無理やりに腕を引く。その腕を触れてみて、何も変化していないことに気づく。その腕は、年老いた老人のままだった。時間を戻っているから若返ると期待していたわけではない。しかし変わらない、その事実が意外にも鋭い氷の一角のように心に突き刺さる。その気持ちを見せないように、わざと頬を膨らませて怒りを表現すると、千春は畑に向かった。そこには枝豆や大根、人参などが整然と植えられていた。その沿道にはまだ蕾の菊が並ぶ。そこに二人は

いた。輝雄青年が、花の前に座り込んでいる祖母の後ろに立って話しかけていた。

「私も、戦地では家の畑や花を世話していました。花はいいですね。妹も好きです」

一生懸命話しかけた祖父への褒美は、祖母の振り返った顔だった。会話を出来ると思った輝男青年は、祖母の脇へと慌てて座り込む。確かに孫にこんな姿を見られたくはないかもしれない。千春の隣からは小さく咳き込む声が漏れる。

「あら、妹さんがいるんですね。お花が好きな」

祖母の顔が、一気に明るくなる。それに冷静に答えるように見える輝男青年の額に、うつすらと汗が滲む。

「ええ。妹といっても、たくさんいます。花が好きなのは十四番目の妹です」

「十四番目！」

「はい。我が家は、十五人兄弟です。もう入り乱れております」

千春がここに来て、初めての祖母の笑顔だった。輝男青年の顔をじつと見て微笑んでいる。そして、着物の中から薄いピンク色の布を取り出すと、それを青年の額にそっと当てた。驚いた青年の顔から、さらに眼鏡がずり落ちそうになった。

「誰がどこにいるのか毎日よく分かりません。でも、兄弟はいいものです」

祖母が、鉢から菊の花を一本切り折ると、輝雄青年に差し出した。「それなら、これは花好きの妹さんへ。あ……でも菊だと縁起が悪いかしら」

申し訳なさそうに顔を下へ向けると、すぐに引っ込めようとする。「いえ、とても綺麗なので頂きます。ありがとうございます」

祖母の手から花を受け取ると、青年は歯を見せて笑った。しかし、緊張で歪んでおり決して素敵とは言い難い。そして、今度は青年が右手を差し出して言ったのだ。

「文子さん。私にも菊の育て方を教えてください。一緒に世話をし

ましょう」

祖母は、あんなにも母親に逆らっていたのが嘘のように、すんなりと祖父の右手に自分の右手を重ねて頷いた。

「楽しい家庭を作りましょう」

「はい」

「子供もたくさん作りましょう」

「はい。……十五人は無理です」

こうして千春の家族は始まった。一生祖母の口からは聞き出せなかったことだろう。

「おじいちゃん、あんな風におばあちゃんのこと口説いたんだ」

肘で突きながら祖父をからかうと、無言で立ち去ろうとする。追いかける一步を踏み出した時、その背中から一言だけ聞こえる。

「ばあさんも、昔は可愛かったんだ」

それも、千春の背後から聞こえる祖母の笑い声でかき消されてしまう。祖父の足は止まらない。

「待ってよー!」

今追う背中、それは先程和室で見た青年と同じとは思えないほど小さな背中だった。

8 千恵子誕生

再び現れた場所に帰ってくると、すぐに手を繋ぐ二人。もうそうすることに違和感はなくなった。祖父が巾着から珠を取り出し使用していくことで、明らかにそれは明るさを失っていた。しかし、それに気づかない振りをして新しい金色の珠を掴む。千春は、すでに数回の付き添いを終えたが、未だに祖父が自分を連れてきた理由を理解出来なかった。これならば、祖母と来た方が思い出を共有できたのではないかと。そして、他の死者達についてだ。一体誰を、どうして選ぶのか。人が死ぬ時に必ず付添い人が必要ならば、なぜ世の中にこの出来事が知られていないのだ。千春ならば、すぐに正明に話すだろう。考えても分からず、祖父が教えてくれるとも思えない。

「次は感動するぞ」

手の温もりを確かに感じ取りながら千春が見ると、祖父が軽く舌を出した。すぐにまた白い靄に包まれていく。この靄は一体どこから来るのだろう。息を吸うと、それが鼻に吸い込まれた気がして何度かくしゃみが出た。あつという間に靄が晴れたかと思うと、また同じ場所に立っていた。珠が壊れた、一瞬そう思った。

「おじいちゃん？ また家だよ？」

不安げに祖父を見ると、祖父は無言で周囲を見渡した。そこで、やつと風景の変化に気づく。色んな景色を知っているからこそ、気づかなかった。

「寒い！ 寒い！」

くしゃみが出たのは、靄のせいではなかったのだ。家の周囲一面が銀世界だ。木々の枝に雪がかかり、家の屋根には数センチほど積もっている。今は、冬だった。季節が変化していた。

「おー。寒いなあ。季節までおじいちゃん考えていなかった」

祖父までが、すぐにくしゃみをする。今まで病院から来た服で違

和感がなかったのが不思議なくらいだ。現代は夏前。たった数時間前が大昔に感じる。

「こういうこともありえるんだったね……」

どうせ姿が見えないのに、なぜ痛みや温度を感じるのだ。今度は冒険心からではなく、防寒の為に早く家に入りたかった。きっと祖父もそうであろう。家への道路を横切ろうとした時。突如一台の車が飛び込んできた。それも、驚くような速さだ。現代の車の形とは異なるが、チェーンも巻いていない。その道具がこの時代にはまだ開発されていないこともあり得るが、それでも危険きわまりなかった。驚きで身体が飛び退ける。

「あつぶなっ！」

「ぴつたりだ！」

二人の声が重なった。千春が文句を言ってやりたい怒りに駆られている側で、祖父は無邪気に喜んでいるのだ。珠を袋に戻して両手をもみ合わせている。

「えっ!？」

祖父の言葉に目を丸くしていると、恰幅のいい年配の女性と、大きな鞆を持った若い女性が降りてきた。そして、脇目も振らずに玄関へ滑るように走っていった。雪で滑ることなど考える事態ではないらしい。車もすぐに走り去る。家の中からも慌ただしい気配を感じる。

「おじいちゃん、何が始まっているの？ 誰か具合でも悪いの？」

先ほどの女性は、白衣を着ていた。あの鞆からしても医者であろう。どの人物の為に来たのか。あの慌て様は、よくないに違いない。

「千春、反対だよ」

祖父は、寒そうに両腕を掌で擦りながら、再び家へと向かう。千春はその場で首を傾げたが、病気でないのならなぜだ。前回とは違う、勝手口の方から家に入ると、台所では大きな鍋が火にかけられていた。今の都市ガスなどには無い時代だ。それだけで、異空間と思える。外で見かけた若い女性が、台所に駆け込んできた。それを追

いかけするように、和室の方から大声が飛ぶ。

「広江さん！ 早くお湯を持ってきて」

この光景、千春はテレビの中で何回も見たことがある。

「おじいちゃん？ もしかして……」

ここは、病院ではない。千春の価値観からは考えられないことが、ここで起きているのだ。昔の人は皆そうしていたのは知っている。しかし、身近な人間で考えたことはなかった。

「そうだよ。お前のお母さんが生まれた日だ」

祖母は、この家で母を生んだ……。色んな器具も薬もないこの場所。頼りになるのはあの女性と家族しかない。そんな心細いことをやってのけたのだ。輝雄青年の姿はない。

祖母の近くにいるのだろうか。

「見に行こう！」

千春は、子供が生まれる瞬間など見た事はない。知識としても、もの凄い痛みと血が出るというこのみだ。それでも、母親が生まれた瞬間を見届けたかった。恐怖よりも興奮が勝る。

「そうだな。あれから、おばあちゃんと結婚した。おばあちゃんのお姉さんもお嫁に行つて、もう二年ほどが過ぎている」

廊下へ行くと、外の冷気を感じさせないほどの活気がそこにはあった。近所の住人までもが廊下に座ったり、和室の前を逡巡している。

「千春も知っているが、おばあちゃんには子供が一人しか生まれなかった」

「十五人は厳しいね」

「そうだな。しかも、千恵子もやっと出来た子供だった。この日は本当に楽しみだったんだ」

楽しみ。そんな言葉とは反対に、輝男青年の姿は廊下にもない。和室の中からは、祖母の悲鳴とも取れる叫びと、それを励ます声が入り交じっているようだ。

「それなら、おじいちゃんはどこにいるの？ 仕事？」

千春の問いに、すぐにばつの悪そうな顔をした祖父が廊下の奥の部屋に視線を移す。千春もつられて同じ場所を見る。そして、祖父の顔にまた移す。

「あそこで寝ていた」

「え？」

「この日が楽しみだったんだよ。毎日カレンダーを見る毎に、あと何日かと計算したもんだ。早くこの手で抱きたかった。一週間前くらいからは眠れないほどだ。緊張したんだな。熱を出して寝込んでいたんだ」

そんな話を、聞いたこともなかった。どんなこともつつがなくこなしているように見えた祖父にもこんな過去があるのだ。

「頑張つて。力みなさい！」

部屋のなかからのその掛け声が、二人の間にも緊張感をもたらすと、奥の部屋のドアが数センチ開いた。千春が気づき、祖父の腕を引く。真っ赤な顔をした輝雄青年が、ふらふらと和室へ近付く。

「あれ、やばくない？」

そんな心配をよそに、青年は部屋のドアを開けた。そして、祖母の枕元に座った。廊下にいる人間の視線も集中する。

「文子、すまん。頑張ってくれ」

膝をつき、祖母の手を握りながら輝雄青年は話しかけた。ほとんど掠れるほどしか出ない声を絞り出しているようだ。それまで歯をくいしばっていた祖母が、うつすらと目を開ける。この寒さの中、顔中が汗で光り、髪の毛もぐっしやりと濡れて額に張り付いている。輝雄青年の吐き出す息が、白くなって部屋に浮かぶことも咎めない。ただ、こんな時にも優しい言葉を掛けられる。そんな人だ。

「輝雄さん……、大丈夫だから。寝ていてくださいな……」

言った後、苦しい悲鳴と大きな息を吐き出す。枕元には、この数時間以上に及ぶ戦いに備えておいしそうな海苔の巻かれた三つのおにぎりが、お皿に乗っている。輝雄青年も、苦しそうに廊下に出てきた。熱が上がっているのか、何も出来ない自分に歯がゆさを感じ

じているのか。そのどちらかの答えだったのかを、千春は祖父に尋ねようとは思わなかった。輝男青年が部屋の扉を閉めた時、その後には一人の人物の姿があった。彼は千春の記憶にもある。祖父母の結婚式にもいた、そして現代の実家の仏間の写真の中にいる。

「あ……、義父さん」

輝男青年が振り返ると、一瞬怯えたように目を見張る。そして、大きく咳をした。

「輝雄くん。何をしているんだね」

それは、廊下の温度をさらに下げるのではないかと思うほど冷たい響きだった。千春が見るその横顔は、明らかに輝男青年を睨み付けている。

「いえ。ちょっと心配で……」

輝男青年は、さらに具合の悪そうな顔で今閉めた障子にもたれかかる。心配して何が悪い、そんな顔をしている。しかし、その訴えは無意味でしかなかった。

「君は、こんな時も役に立たないんだな。見合いの日、君の姿を見た時、なんと頼もしそうな青年だと思ったよ。しかし、それは私の目が狂っていたのかもしれない。確かに君は働き者だ。しかし、子供はなかなか出来ない。やっと出来たと思ったら、いざという時にこのさまだ。お前は、何の役にも立たないんだな。文子には、風邪がうつるから近寄るな」

輝男青年の顔が一気に引きつった。そして、感情を抑え込むように下唇を噛みしめる。義父は青年の顔を一瞥すると、その悔しそうな顔に満足したのか和室へと入っていった。祖母は、この諍いが耳に入らなかったようだ。相変わらずの悲鳴、悲鳴。青年の拳に力が込められる。周りの人間も一切声を掛けようとはしなかった。余計に我慢出来なかったのか、そのままの薄着で外へ飛び出してしまった。

「あれは……、悔しかった」

唐突な告白。どこか見てはいけないものを見たような申し訳ない

思いで隣に目を遣ると、祖父は青年の飛び出した玄關を悲しげに見ていた。

「あの……曾おじいちゃん。いつもあんな感じだったの？」

厳格。確かに雰囲気はそのものだ。しかし、あれはそれ以上の嫌がらせにも取れた。実家の仏壇に飾ってある曾祖父はいつも笑顔だ。あれほど優しいさのない人間だったのか。

「いや、そうでもない。確かに、いつも意地悪は言われたさ。子供はまだか、なんて毎日のようだった。何をしても気に入らなかったのだろう。せつかく養子にしたのに期待はずれだと思ったようだ。だが、その気持ちも分からなくともない。今となってみればな」

歳を経なければ分からない感情はたくさんある。説明されたとしても、理解出来ない。今の千春がまさにそうだった。ただ青年が、祖父が可哀相でしかなかった。二人の間に沈黙が流れる。

「おじいちゃん……。時間大丈夫かな」

あまりここで時間をとられるわけにはいかないだろう。今まで一つ一つに時間はかけて

いないつもりだが、珠はまだ残りが多くある。

「もうすぐだよ」

祖父のその言葉を頼りに、信じて待つことにする。この生まれる瞬間を、過去に立ち会えなかった分じっくり味わいたいのかもしれない。聞こえるのは、恐怖を起こしそうなほど苦しい声だけだ。床板の冷たさが体中を凍らせる。その寒さに身体をぶるつと何度目かに奮わせた時だった。廊下の静寂を突き破る赤ん坊の鳴き声が、祖母の悲鳴に加えられた。祖父と千春が、驚きで目を合わせる。

「産まれたッ！」

廊下のあちこちから上がる歓声にも似た喜びの声。

「赤ちゃん見たいな」

千春が言うと、祖父もすぐに頷いた。二人が和室に入ると、先程の曾祖父が部屋の隅で布団に寝かされている。両足が座布団を下に敷き高くされている。その体勢を取っていると、いくら立派な顎髭

があらうとも滑稽に見える。

「おじいちゃん。ねえ、どうしたんだろう……」

しかし、千春は赤ん坊が目に入ると、途端に曾祖父のことなど忘れてまう。お湯で洗われて綺麗な布に包まれて、赤ん坊が祖母の脇に寝かされているのだ。

「やったあ！ お母さんでしょ、これ」

千春が、赤ん坊に顔を近づけた。顔を真つ赤にして泣いているその赤ん坊が、二十数年後に、千春を生むのだ。大きくなって、恋をする。そして、千春がここにいるのだ。それは、まさに信じられないほどの奇跡だ。こうして、自分も生まれたのだ。涙ぐみそうになったところに、輝雄青年が再び扉を開け、立ちつくしている。

「輝雄さん……。見て。お父さん、私の姿を見ていたらいきなり倒れちゃったの。気絶したみたい。それに女の子よ、抱いてあげて」

祖母は、ふらふらと自分に近寄る青年に話しかけた。輝雄青年は頷き、祖母の枕元に近寄り、赤ちゃんを抱き上げた。隠すこともせず泣いている。「ありがとう」と呟く言葉が、皆の耳に聞こえてくる。

「我が家の男性は頼りないわね……」

曾祖母が、呆れたように言う。しかし、その目はとても穏やかだった。新しい家族を囲み、家族が笑う。祝いを早く言おうと、廊下からも人が入る。千春達は、その光景を目に焼き付けてその場を後にした。玄関を出ると、祖父がどんよりとした曇り空を見上げながら言った。

「玄関を飛び出した時、今までの不安や鬱憤を思い出していたんだ」
祖父は、聞いたこともない話を語り始めた。千春は頷きながら、一瞬家を振り返る。

「しばらく近所をうろついて、近くで子供を抱いている父親を見てハッとしたよ。何をしているんだと。おばあちゃんが、一生懸命子供を生もうとしている時に、逃げようとしたんだからな。これからは、もつと逃げたくても逃げられなくなる。覚悟を決めたんだ。何

があつても踏ん張ると。もつと頼りにして貰えるように、しっかりと父親になるように、頑張ろうと誓ったんだ。……まあ、結局はあれから熱が上がってしまった。目が覚めたときには、隣におばあちゃんの義父さんも寝ていたんだ。笑ってしまったよ。それが効いたのか、あまり嫌味も言われなくなったさ」

その場面を想像して、千春は笑ってしまった。確かに、恥ずかしかっただろう。しかし、それは曾祖父が輝男青年の変化を感じ取ったからではないかと思つた。新しい命を迎えるとは凄いことだ。母が生まれた時、こんなにも喜ばれたのかと知ると、なぜか千春は泣きそうになった。

「あたしも……早く子供が欲しいな」

千春がそう言つと、祖父は静かに微笑んだ。寒い外、夜が近づいている。また、一つの珠の役目がここで終了した。

9 入院事件

「おじいちゃん、幸せだね。本当に、家族っていいね」

「そうだなあ。そうなんだろうなあ。おじいちゃんは、きっと幸せなんだよ。でも、いつもその幸せを感じる暇がないほど何かが起こって忙しかったり、余計な感情のほうが強くなってしまっただよ」

祖父が、現れた場所でまた巾着に手を入れていた。千春もその中に手を入れてみて、初めて気づいた。外の気温のせいではない。千春や祖父のせいでもないと思った。しかし、使用済みの珠は冷たいのだ。光っている珠に触れると温かい。楽しい思い出への旅が、珠を触ることで現実へ引き戻された。いや、これが現実なのか夢なのか、もう千春には分からなかった。もしかしたら、目が覚めた時には祖父が起きていて、心配かけたなどと言って笑うかもしれない。もっと良ければ、目が覚めた場所は病院ではなくて、いつものように新宿のマンションかも知れない。大音量で鳴り響いている目覚まし時計を止めて、テレビをつけて着替え、急いで会社に行く。しかし、もうその考えの方が夢に等しいと、頭のどこかでは分かっていた。冷たい珠には、もう触れないようにしようと思った。温かい珠に触れよう。そして、祖父と触れ合っていよう。頼りなくても、かっこ悪くても、祖父はいつも誰に対しても誠実で優しい人間だ。それが、千春には人間で一番大事なものだだった。

「千春には、全部知っておいてほしいんだ」

突然祖父に言われ、千春は首を傾げた。ここまで来て何を言っているのだ。見れば見るほど祖父を好きになった。早く次へ飛びたいと思うのに。

「分かっている。もう心構えも出来ているよ。おじいちゃんのもつと情けない姿も見たいな」

「千春と来たかったのは、それが理由だ。お前は素直だ。心も綺麗だ。純粹な目で、おじいちゃんのことを見て、それでも分かってく

れると思っている」

祖父はいつも千春のことを子供扱いした。そんな風に思ってくれていたことが嬉しくて、満足げに右手を差し出す。胸を張り、満面の笑顔で。その上に珠を乗せ、千春の手を握った祖父に、不安気な色が浮かんだことに千春は気づかなかった。白い靄に包まれていく靄が晴れてくると、いい加減見慣れた景色があった。

また、実家に来た。祖父には家族以外の思い出がなかったんだろ
うか、と不安になる。千春は、移動前に祖父が呟いた言葉をすでに忘れてしまっていた。祖父は、手を離すとどこかよそよしくなった。すぐに歩き出す。

「よし。あれからまた数年。千恵子が小学校へ上がる年だ。家に入るう。あ、玄関にいる犬の黒い方には気をつけるんじゃ。大丈夫だろうけどの」

「分かっている。シロとクロだね」

二匹の犬だ。よく母に聞いていた。真っ白と、真っ黒の正反対の二匹を飼っていたこと。性格も、正反対だったこと。シロは人懐っこい犬で、よく河原に散歩に行ったという。とても可愛くて十二年目の春が来ると同時に死んでしまったとき、母は一週間学校を休んだらしい。対して、クロは全く言うことを聞かなかった。誰に懐くこともなく三年で死んだと聞いていた。ご飯をあげるのも一苦労で吠えられる用が必要だったこと。この犬たちに会えるのは嬉しかった。千春達が家の敷地に入った途端、けたたましい鳴き声が響いた。痰が絡まった親父のような吠え方だ。低くて、どう猛な野犬をイメージさせる。

「あいつの鳴き声には苦労したなあ。こんな形でも人が来たのがわかるのかの」

嬉しそうに祖父は言い、玄関の前に立つ。クロが、鎖を限界まで伸ばして玄関に来ようとしている。千春達の位置からは、真っ黒な前足が壁の脇から見えている。鎖を引きちぎる前に、家の中に入りたい。しかし、祖父は入ろうとしない。今までは人が動き回りドア

が開いていた家とは違い、今、居るのは二匹の犬だけ。いやに静かだ。玄関脇の水道に、柿がザルに入って置かれている。クロが鳴き止むと、その蛇口から一滴ずつ落ちる水の音までもが聞こえるほどだ。誰もいないのだろうか。

「おじいちゃん、犬を見に来たの？」

そんなはずはない。しかし、これでは仕方がない。千春の声に反応したようにクロが再び狂ったように吠え始める。その横で、シロが落ち尽きなく歩き回っているのが見えた。何だ、何が起ったのだ。

「いや。おじいちゃんが、帰ってくるのだよ」

祖父は、そう言うと言の方を見つめた。その宣言どおり、すぐに祖父が一人で帰ってきた。前回の姿よりも白髪が増えている。そして、頼りない雰囲気は消えていた。堂々と歩くその姿だが、顔が真っ青である。

「なに。今度はなに！」

ただごとではない雰囲気を感じた千春は、急に心臓が早鐘を打つを感じた。この家は、本当に慌ただしい。祖父が何かを言ったが、クロの鳴き声にかき消されてしまう。二人の前を、三十代であろう輝雄が、さつと通り過ぎて鍵を開けて家へ入った。と、思ったら、すぐに出て来た。

「おじいちゃん、何しているんだろう。様子がおかしいでしょ？他のみんなは？」

千春は、目の前をウロウロする若き輝男にぶつからないように避けながら言った。行つては来たりと素早く動くので祖父までもが驚いている。自分の記憶にはここまで動いた覚えがないのだろうか。

「他のみんなは病院だ」

「病院！　どこが悪いの！」

千春は驚いて、勢いよく立ち上がった。千春の声が大きかったのか、クロにシロの鳴き声までもが加わる。犬達も動揺して鳴いているのかと心配した輝男青年が、なだめに行く。それを目で追いなが

ら、千春は祖父を不安そうに見た。

「千恵子が、病院にいるんだ」

誰か死ぬのか。いや、季節が違う。曾祖父は冬、曾祖母は春に亡くなったはずだ。母が入院しているというのか。しかし、それならばあの輝男青年の落ち着きのなさも頷ける。クロが鳴くのをやめたかと思うと、引き裂い小さな綿の固まりを放り投げてきた。恐らく人形だったもののようなだが、最初に何の形をしていたか検討もつかない。

「お母さんが具合悪いっていうことね……。おばあちゃんは？」

「おばあちゃんは、町会の旅行で温泉に行っている。この後、帰ってくるぞ」

クロが人形破りに飽きた頃、バスが家の前で止まる音がした。年配の女性が放つ、独特なはしゃいだ挨拶が玄関まで聞こえてくる。そして、植木に隠れて姿の見えない祖母は、鼻歌を歌っている。シロが、祖母のところへ行きたいというように鎖をかじる。その脇からゆらっと現れたのは、青から怒りの赤へと顔色を変えた輝男青年だった。ゆっくり、踏みしめるように一步を踏み出す。……おばあちゃん！ お願いだから鼻歌なんて歌わないで！ 千春は、胸の前で両手を組み合わせ、片目だけぎゅっと瞑って祈った。しかし、そんなことが通じるはずもない。祖父も、その光景をジッと見つめていた。すぐに植木の陰から現れた祖母は、両手にお土産の袋をいっぱい持っていた。数秒後には、嵐が来る。祖母は、それを露とも知らずに咲いている花のようだった。輝男青年の姿が、祖母の目にうつる。そして、すぐに笑顔になった。まるでスローモーションのようだった。笑顔で駆け寄る祖母。ゆっくりと歩いていく輝男青年。異常に気づいて、祖母の顔が瞬時に困惑へ変わる。千春には輝男青年の顔は見えなかった。いや、見なくて良かっただろう。背中から感じるその怒りは、離れた位置にいた二人にも感電しそうなほどだった。そして、それは一瞬のうちに起こった。祖母が、竜巻に吹き飛ばされて舞い上がったかに見えた。祖母が殴られたと分かった時、

千春の全身が恐怖で戦いた。輝男青年は興奮して腕までが真っ赤だ。その両腕を伸ばし、背筋を整え、しっかりと両足で地面に踏ん張る。まさしく仁王立ちだ。祖母は、地面に尻餅を付いたまま輝男を見上げ、袋から散らばった土産が虚しく転がっている。次の瞬間、その目からは大粒の涙が溢れ出した。立ち上がる力すらないようだ。

「何をするんですか……」

祖母は一言だけ呟くと、胸の辺りを押さえた。どうやら顔ではなく胸を殴ったようだ。しかし、それも飛んだ距離からすればどちらでも関係ない。相当の威力だったに違いない。それでも祖父はうつたえることはなかった。まだ吹き出す怒りを叫びとして吐き出す。

「お前が！ 昨日の朝気づかなかったのか！」

「何か……何かあったんですね……？ どうしたんです？」

胸を押さえていた手を口に当て、驚きの形相を向ける。祖父は、千春の隣で何も言わずただじっとしていた。もはや、心配することも笑うことも、泣くこともない。感情が消えてしまったかのように、祖父は無表情だった。

「千恵子が今日入院した。その病院だ」

輝雄青年が、小さな声でぼそぼそと呟いた。それは聞き取れないほどで、祖母も同じだったようだ。信じられないという気持ちもあったのだろう。

「え……？」

「盲腸らしい。昨日の夜から腹痛に苦しんで……。朝、すぐに病院に連れて行ったんだ。病状がかなり進行しているらしく、危なかった」

「あ……それであの子……」

祖母には思い当たる節があるのだ。口元に当てていた手がだらんと落ちる。今では見ることも無い、真っ赤な口紅を塗ったその唇は、異様に艶やかだった。

「なにか思いあたるんだな。」

「そつえばあの子、昨日の朝に学校へ行く前吐いたんです。でも、

熱もないし元気だからって。お母さん、楽しんできてねって……。
大丈夫なんですよね……？」

祖母の顔が、一気に後悔の色へ変わる。続けるような視線を祖父へ向けた。

「やっぱりな。医者にも同じことを言われたよ。その時点で連れてくるべきだったとな」

祖母は何も言わない。じつと地面のどこか一点を見つめたままだ。
「早く着替えて来い。今、病院にお義母さんたちが行ってくれている。千恵子はもう大丈夫らしいが、お前を待っているぞ」

それだけ言うと、輝雄は家に入って行った。残された祖母は、しばらく放心していたものの、土産の荷物を拾い始めた。その手にはクマの人形がある。千恵子へのお土産なのだろう。その人形についた土を手で払いながら、祖母は静かに泣いていた。

「ごめんね。ちいちゃん……」

そう呟きながら。隣の動く気配に千春が見ると、祖父が祖母に歩み寄ったのだ。人形を顔にすりつけるようにして抱く祖母に、頭を下げる。それは、深く丁寧なお辞儀だった。

「悪かった。文子」

顔を上げると千春に見向きもせずに門の方へ立ち去ろうとする。

祖母は、謝られたことすら知らずにひたすら荷物を袋の中へ拾い集めた。そして家の中へ駆け込んで行った。玄関でクロに手の中の人形を狙われたが、見向きもしなかった。

「おじいちゃん……大丈夫……？」

移動地点に戻ると、千春は笑顔で祖父の顔を覗き込んだ。しかし、祖父は真顔だった。口を開いて話そうとしては閉じる。それを数回繰り返した後だった。

「おじいちゃんはな、あれでおばあちゃんのあばらを折ったんだ」

この一言を言うのには、それだけの長さが必要だったのだ。そういえば、何か胸の辺りを押さえていた。まさか、怒りにまかせて怪我を負わせていたとは。

「あのあと、病院に行っても何も言わなかった。ただただ、千恵子と両親に謝っていたんだ。怪我をしているとは思わなかった」

千春には、そんな祖母が想像できた。我慢強く、自分を責め続けたのだろう。

「でもな、夜に我慢出来なくなった。呻き出したから、次の日病院に連れて行ったんだ。折れていると聞いたときは、びっくりしたよでも、おばあちゃんは入院すると皆に分かってしまうからと、必死で平気な素振りをした。おじいちゃんは、申し訳なかったんだ。千恵子の異変に気づかなかったのは、おじいちゃんも同じだったからね。でも、おばあちゃんは一度も責めてはくれなかった。おじいちゃんも、一度も謝れなかったんだ。これは、死んでも許されないことも知れん」

「……」

意外だった。喧嘩しながらも、仲のいい姿しか見ていなかった千春には、受け入れがたい事実だ。つまり、理由があるとはいえ……故意の暴力をふるったということか。

「ここに、来れて良かった……」

そう言つと、祖父は一人目を閉じた。

10 一度の旅

しばらく、千春は祖父に話しかけられなかった。なぜだろう。よく知っている、いつも可愛がってくれた祖父なのに。ふざけても、失敗しても笑ってくれた、祖父なのに。あの場面を見てから、どうしても祖父を許せなかった。今までとは何か違う感情が湧き上がってきたことに、千春は気づいた。このことを家族は誰も知らないのだろうか。祖母は、なぜ祖父を許せたのだろう。千春は、正明以外の男性とも付き合った経験がある。その中で、喧嘩をしても暴力を振るう男はいなかった。まさか、祖父が……。最低……その感情を拭えなかった。最低、最低。その二文字が、頭の中を駆けめぐる。批判する一方で、不安にもなった。千春は、もう自信がなかったのだ。祖父が思うほど自分の心が綺麗とは思えなかった。食べ物好き嫌いもある、我が儘もいたい、普通の一人の人間だ。これ以上何を見ればいいのか。何のために見るのだ。どうして見なければならぬのだ。そしてなにより、祖父を嫌いになってしまったらどうしよう、という不安。怖い。行くのが、怖い。

知りたくない。見たくない。珠はもう半分使った。残りは……、誰か。そう、母親に変わりに見てほしい。一度、今の時代に帰れないか。祖父に頼んでみようか……。そう思っ、祖父の顔を見た瞬間だった。全身に鳥肌が立った。千春の今の全ての感情は顔に出ているのだ。祖父は寂しそうに、しかし射るような目で千春を見ていた。

「嫌になっただか？」

そう言われて、千春は言葉に詰まる。ここで否定してもきつとばれている。それに、気持ちをごまかせない。

「嫌……とかじゃなくて、怖いの。知らないおじいちゃんの姿見るの……、もう怖い。あたし、おじいちゃんのこと大好きだったのに……」

自分でも気づかないほど千春には衝撃だったのだ。思い出すだけで知らずに涙が頬を伝い落ちた。声が弱く震える。目を合わせられない。祖父は、小さく溜め息を吐いて首を横に振った。

「ありのままを見るんだ。千春。ここまで来たら見なくてはならん見るんだ。これが、おじいちゃんなんだ」

あまりにも横暴ではないか。いきなり連れてきて、嫌いになれとでも言うのか！それが千春の中で爆発する。

「どうしてあたしを選んだのよ！ あたしは、こんなおじいちゃんなんて見たくなかったのに！ 嫌いにならせないでよ！」

お願いだから、嫌いにさせないで……。こんな最後になって何がしたいのだ。祖父が死ぬ、その事実さえまだ完全に受け入れることは出来ないのに、まだ試練を与えるのか。もしかして、祖父は自分のことが嫌いなのではないか……。そんな考えまでが脳裏を過ぎる。絶るように、否定の言葉が欲しくて、千春が祖父を見るも慰めの言葉は貰えなかった。更に、冷たく事務的に言われるだけだ。

「さあ、行くぞ。次だ。時間がない」

きつぱりと告げると、祖父は巾着から珠を一つ取り出した。光っている。千春には、今やその珠が怪しい光にしか見えなかった。ついさっきまで冒険気分を満喫していたのに。帰ったら、家族や正明に、友達にこの不思議な体験を自慢してやろうと思っていた。しかし、今は違っていた。

「嫌……。行きたくない。おじいちゃん。嫌だよ……」

こんなことを言うのはいつ振りだろう。千春は、子供に返ったように駄々をこねた。

「お願い……。嫌だもん……」

拗ねたように言つて、そっぽを向いた。千春には分かっていた。昔からこうすれば、祖父は、許してくれるんだ。溜め息を一つ吐いて、仕方のない子供だな、と。人混みを歩けば、おんぶをしてくれた。買い物へ行けば何かを買ってくれた。母親に怒られれば、慰めてくれるんだ。それらの行動が今の絶大なる信頼へと導いてくれた

のだ。そのイメージを壊す必要などない。嫌なものは嫌なのだ。

「千春、いい加減にしなさい」

首を項垂れて泣く千春の頭には、鋭い声が降ってきた。その声は、有無を言わせない強さがあった。怒りではない。半分呆れたような声だ。ずるい。そんな声を出されると、千春もこれ以上の我が儘を言えなかった。千春は祖父の顔を見ることがなく、珠を握った祖父の手に、自分の手を重ねた。おじいちゃんなんて、嫌いだ……。そう、心の中で思いながら……。また実家に来るかと思ったが、白い靄が消えると、千春達の前には草原が広がっていた。その光景に、少しだけ嬉しくなる。広い視野。建物もなく、あるのは一面緑の草。風が吹けば、草の匂い。手を伸ばせば掴めそうなほど、確かな匂い。祖父の手を離すと、千春は両手を思い切り上に伸ばした。深く息を吸い込む。なんという開放感だろう。

「きもちいい！　ここどこ？」

千春は、祖父への嫌悪感も忘れて聞いた。

「北海道だよ」

雪もない、花もない。だが、暑くもない。ちょうど春が過ぎた頃だろうか。メロンやじゃがいもやカニ、浮かぶのは食べ物ばかりだ。「北海道なんて来たことあったんだ」

「千恵子が、仕事場で行われたゲームで当てたんだよ。家族三人で初めての旅行をしたんだ」

「仕事？　お母さんそんなに大きくなったの！……ここで、何か起こるの……？」

先程の気持ちの整理がついたわけではない。それでも今度はそれなりの心構えをしようと思った。もう何があっても驚かないぞ、と自分に言い聞かせる。

「いいや。何もなし」

祖父の声は、とても穏やかだった。前回のような不安そうな声も後悔も、何もない。それでいて決して楽しそうにはしゃいでいる訳でもない。ただ、なだらかな丘の上を滑るような声だった。

「何もないんだ……」

ただ、千春はその言葉を繰り返す。心に力を入れた分、拍子抜けだ。そこへ、一台のバスがやってきた。バスの横には大きくバス会社のロゴが書かれ、フロントガラスには旅行会社のステッカーが貼られている。草原の前の道路に停車すると、すぐに溢れんばかりの人が、一列になってバスから降りてきた。乗車口で、時計を見ながら添乗員が何か話している。

「あ、お母さんだ」

バスから降りてきたその中に、千春は見知った人を見つけた。多少今よりも若いのが、違うのは髪型と服装くらいだ。後ろに祖父母もいる。祖父母は千恵子とは反対に一気に老け込んでいた。千春の記憶のままに近付いている。その一行は、草原の奥にある一軒の小屋へ向かうようだ。今度は真つ赤な制服に身を包んだガイドが、先頭で旗を掲げて歩き始めた。各々が自由に会話をしながら従っている。千春と祖父が追うと、それは牛小屋だった。ガイドに代わって、今度は長靴を履いた男性が現れる。挨拶をして、牛の説明を始めた。祖父は、何をしに来たのだ……。

「ここで、乳絞りをしたんだ……」

祖父が、家族三人を見つめながら、千春に話しかけた。

「それだけ……？」

「そうだよ。でも、初めての旅行で三人で乳絞をするとは愉快だった。ほら、ごらん」

祖父の視線の先には、幸せそうに笑う三人の姿があった。千恵子が、乳を搾っては手が臭くないか、何度も確認するように嗅いでいる。それを見た祖母は笑っているし、祖父は自分もやりたいと身を乗り出している。仲のよさそうな、しかしどこも特別ではない普通の家族だった。今と変わらない。昔もこうだったのだ……。その時だった。千春は、一人の女性と目が合った。偶然目が合ったというより、凝視されている視線に気がついたというほうが正しい。靈感があるのか。千春の母親と同じくらいの年齢だろう。白髪混じりの

頭が妙に疲れて見える。どうにも気味が悪い。

「ねえ、おじいちゃん。あの女の人、あたしのことを見ていない？」

祖父の後ろに隠れるようにして、千春が耳元で囁いた。

「そんなわけないさ。たとえ靈感があっても何もされないよ」

祖父は千春の言葉に見向きもせず、昔の自分に酔いしれていた。千春は、どうしてもただの靈感で済ませられなかった。じっと見られる分、祖父の背中から見つめ返す。すると、その女性が、千春に向かつて歩いてきたのだ。咄嗟に、やばいと思った。気に障ることをしてしまったのだろうか。除霊されたら自分はどうなるのだ。千春が混乱している間に、女は近付いてくる。逃げようとしたが、祖父は動こうとしない。何も出来ずに焦っている、女が目の前まで来てしまった。祖父もやつと異変に気づいたようだ。振り返って女性に目を遣ると、目を見開いた。祖父は千春を守るように、自分の背中に回した。その行動に、千春はほっとした。祖父が守ってくれている、と。なぜかきゅっと胸が締め付けられ、その小さな背中を見つめる。しかし、その感動も女の放った一言で遮られた。

「あなたも……、付添い人ですか？」

今まで聞こえてきた、家族の騒ぎ声や牛の鳴き声、全てが聞こえなくなった。祖父の背中から顔を出す。それと、祖父が声を発したのは同時だった。

「あなたは……」

女性は、千春達を寂しそうな目で見てから、自分がいた場所を振り返った。そこには、一人の男性が、祖父と同じように微笑みながら旅行者を見ていた。あれは……。

「あの人、私の夫なんです。私も付添い人です……」

女性は千春だけを見ていた。そして弱々しく微笑む。あの男性とは違う微笑みだった。付添人にしか分からないだろう微笑み。一気に周囲の音が千春の耳に戻ってきた。母親を見ると、乳絞りが終わったようで、三人で絞りたての牛乳をコップで飲んでいる。

「こんなことって……あり得るの？」

千春は、誰にともなくそう言うと、もう一度女性の顔を見た。女性性は、一度だけ頷いた。千春と祖父、そして木村と名乗る夫婦は、最初に着いた草原に並んで腰を下ろした。乳絞りを済ませたツアー一行は、バスに乗り込みどこかへ走り去っていった。四人の存在など気づかない。見向きもせずに。話してみると、木村夫妻も都内の有名な病院から来ていた。夫は胃癌を患い、何年もの闘病生活を繰り返していた。子供も成長し、これから旅行三昧だと決めた矢先だった。妻が、千春に近付いてきた時とは打って変わった明るい口調で話し続ける。

「驚きましたよ！ 目が覚めたら、この人が元気に歩き回っているんですもの。悲鳴を上げてしまいました。珠のことを聞いて、どこに連れて行ってくれるのか楽しみにしていたんです。そうしたら、昔行った旅行ばかり！ 一つくらい秘密を教えてほしいわ」

少し意地悪そうに言う妻に、夫もふてくされて返す。

「お前だって、喜んでいたじゃないか」

しかし、その口調に嫌味はない。これが二人のスタンスなのだろう。これだけを見れば、この四人には何も問題はない。死にかけている二人と、送り出す二人。気持ちの上では言葉にしくなくても分かる。どこかで聞いて欲しいとも思う。だが、誰も口にしようとはしなかった。曖昧な沈黙が過ぎた後、切り出したのは夫の方だった。

「よし。そろそろだな」

それを聞いた妻の表情が一瞬強張り、焦りを見せたのを千春は見逃さなかった。横にいる祖父の顔から、同じ事を感じたらしいことも分かる。

「あなた、ちょっと向こうを散歩してきたら？ 最後に歩くことも必要よ」

腰を上げた夫を、半ば追い出す形までとる。妻は笑顔で夫を見送り、彼が離れたことを確認すると、途端に弱々しさを見せたのだ。それもせっぱ詰まった口調で。

「お願いがあります」

何度も夫の位置を確認し、早口で告げる。逸らすことができないほどの、真剣な目つき。

「私達はここが最後の珠なんです。もう珠は全て透明です。まさか最後でこんなチャンスがあるとは思いませんでした。お願いです。その珠を私に下さいませんか？」

祖父は、予測していたのだろうか。瞬き一つせずに妻を見つめている。

「旦那さんに言いましたか」

そして、静かに言った。妻は首を左右に振ると、それでもはつきりと食い下がった。

「いいえ。最初にあの人は、絶対に私ではない人を探すと言っていました。だから、最後まで……。見送る瞬間に言うつもりです。私は、あの人といつまでも一緒にいたいんです」

「もしも旦那さんに反対されたらどうするんですか。しかも、奥さんはまだ健康だ。命を粗末にしてほくはないですよ」

「私は、それが粗末にすることだとは思いません。夫がいないことが私には死に値するんです。お願いです……」

「分かりました」

祖父が、力強くそう言った。祖父が拒絶すると思っていた千春と妻は、驚きでその顔を凝視した。妻が、喜びの顔で口を開きかけた時だった。再び祖父が続ける。

「ただし、まだ決めたわけではありません。珠を使いきったときにあなた方の病院に参りましょう。あなたは、今の考えをきちんとご主人に話すことです。了解がいただけたなら、私はその時あなたにあげましょう。でも、もし否定された場合は諦めてください」

「でも……っ」

なおも食い下がろうとする妻は、夫が近づいてくる姿が見え口ごもってしまった。ここで何が話されていたかを知らない夫は、笑顔で妻の肩を叩く。

「いや、それでは。お達者で」

いかにもまたどこかで会えるような雰囲気で、夫が千春達に手を振る。妻の異変には気づいているのか。それでも知らない振りをしているのか。聞くことは出来ない。妻は、何かを堪えるようにじつと下唇を噛んでいるが、必死で笑おうとしていた。

「ごきげんよう……」

祖父の挨拶に加え、千春も手を振り返す。二度と会うことのない、その男性に。夫は満足げに頷き、その脇で妻が一礼して、二人は消えた。

「おじいちゃん。どうするの……？」

「なに。言った通りさ」

二人はしばらく夫婦が消えた草原を見ていた。祖父が巾着を取り出す。それはすでに半分の珠の光を失い、今や巾着自体の光も薄れているような気がした。

「さて、行くかな」

祖父が、少しだけ切ない顔で右手を差し出した。

11 世界一の花嫁

白い靄が晴れる。千春は、足元の感覚が妙に柔らかいのを感じた。土とは違った感触だ。はつきりと見えたそれは、絨毯の上だった。今度は、建物の中のようなのである。ホテルのロビーだろうか。天井にはシャンデリアが装飾され、並べられた高級そうな椅子にはドレスを着た人たちが腰掛けている。思いつく限り、千春はこの場所を知らないはずだ。

「おじいちゃん、ここどこ？」

いつの間にか手は離されていた。少し進んだ廊下の先で、千春を手招きしている。祖父の前には大きな両開きの扉があった。両脇には、タキシードを着た男が立っている。そしてその脇に立て掛けられた名前を見て、千春は大きく息を吸い込んだ。笑顔が飛び出す。

「おじいちゃん！　もしかして！」

集団が一つワイワイ騒ぎながら通り過ぎていった。髪型が一昔前のセットで、思わず笑ってしまいそうになる。高揚感が漂う会場にいます、同じ気分が感染する。

「結婚式だよ」

「やっぱり！　お母さんはどこ？」

千春は首を左右に振って、母親の姿を探した。広間の前には、父と母の旧姓の名字が書かれているのだ。これは貴重な姿が見られるかもしれない。

「まだ控え室だろう。それより、見てごらん。すごいだろう」

そう言って祖父の視線の先を見ると、祖父と同じ顔の人間が集まる集団があった。みな一様に背が低めで、眼鏡を掛けている。少しだけお腹が出ていて、優しそうだ。

「あ、もしかして……」

「おじいちゃんの兄弟達だよ。みんな呼んだんだ」

自慢げに告げる祖父に対して、千春は苦笑いを返した。最初の珠

で見た兄弟達が、今こんなにも成長して現れている。この話は、千春も母親からいつも聞かされていた。祖父の兄弟を皆呼んだことで、母親は自分の結婚式に招待する友人の数を限らせてしまったのだ。母親達の控え室は、広間の近くですぐに見つかった。隣同士の部屋に名前が並んでいる。母親の方からは物音一つ廊下に漏れていなかったが、父親の部屋はなにやら騒々しい。

「嫌ならお前がどっかに行けー」

突如廊下にまで聞こえた声に、千春は嫌な予感がした。隣の祖父も、目を丸くして千春の顔を見た。どうやらこの時は部屋の中にいたので知らないようだ。祖父が、父親の控え室のドアに耳を近づけた時、中から再び男女の叫び声が上がった。

「兄貴！」

「馬鹿な子だね！」

中から一人の女性が出てきた。父方の祖母だ。その隙に二人が部屋を覗くと、なんと千春の父親であり千恵子の夫になる男が、酒瓶を抱えて喚いているのだ。そして、姉と弟に瓶を取り上げられようとしている。

「お父さん……今のまんま」

千春は、げんなりとした声を漏らした。千春の父、信輝は大の酒好きだ。仕事もきちんとなすし、人間関係もかなり円滑のようだ。千春は父親が大好きだが、時々見せるこの顔は嫌いだった。この一生の晴れ舞台で、何をしているのだ。これでは祖父にも怒られるのではないかと不安が過ぎる。しかし、その祖父は妙に納得した顔で言った。

「だからあいつは披露宴のとき様子がおかしかったんだ……」

そして、吹き出すようにして笑ったのだ。

「様子がおかしかった？」

「ああ。何度も席からいなくなるし、スピーチもろくに出来なかった。多分、飲みすぎて具合が悪かったんだろう。あいつらしいな」

千春は、祖父と父親が本当の親子のように仲がいいことは知って

いた。だからだろうか。今こんな姿を見ても、祖父は全く驚かないようだ。むしろ心の底から笑っているように見える。タキシードを着た男が、一人やってきた。

「お待たせ致しました。お時間です」

その男は、酒瓶を持った父親に目が行き、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに隠した。こんな男の嫁になる母親を、気の毒に思ったかもしれない。それほどの醜態だ。すでに真っ赤な顔をした父は、それでも真っ直ぐに立ち上がると大きなげっぷをした。気合いを入れ直すように自分の両手で頬を叩くと、千春達の前を通り過ぎていく。家族がぞろぞろとその後を追った。

「結婚式のことを聞くとね。お父さんは覚えてない、って言うの。ある意味本当だったんだ……」

含み笑いをした祖父も、その後を追う。しばらく、千春はホテルの中を一人でうろついた。ウエディングドレスに、華やかな飾り。目を奪われるものばかりだ。式場に戻り中を見るが、父の姿がなかった。辺りを見回すも、祖父までもが見当たらない。今や友人や親戚が祝辞を述べている。

「おじいちゃん……？」

千春が、二人を捜そうとした時だった。嫌な音が耳に入る。予感には当たってしまったようだ。その音はトイレから聞こえてきた。千春が中に入ろうとすると、入らずにUターンしてくる人もいる。出来れば千春も入りたくはなかった。激しく嘔吐する音と、流水音が交互に聞こえてくるのだ。中で何が起きているのか恐怖とも言える。覚悟を決めて一番近い個室を覗くと、祖父が父の背中をさすっていた。父は便器に半分顔が埋まっている。

「おじいちゃん！ 何をやっているの！」

「いや、苦しそうでな」

「ほつときなよ！ お父さん、自業自得だよ」

千春は、自分まで気分が悪くなりそうなのを堪えて冷たく言った。すると、またこみ上げてきたのか、父はもの凄い音を発した。思わ

ず耳を塞ぎたくなる。

「お母さん……、この人のどこが良かったんだろう」

誰もが両親に対して一度は抱く疑問ではないだろうか。こんな場面に会った度、千春は不思議で仕方なかった。そして、ふと祖父母に対しても同じ疑問を持っていたことを思い出した。千春が理解できなかった、あの祖父の行動……。父の背中をさすりながら、その祖父がゆっくりと話し掛ける。

「信輝くん。私は、本当は君に養子に入ってほしかったんだよ」

その嫌な音と、祖父から少し離れようとしていた千春は、その言葉に驚いて振り返った。

「私は、自分が養子で大変な思いをした。あんな情けない想いを、千恵子の婿にはさせたくないと思っていた。しかしね、どこか寂しくもあったんだ……。形式上のことだ。大したことではない。それでもね……。君が、もしかしたら養子にしてほしいと言ってくれるかもと甘え考えを抱いた時もある。でも、何も言えなかった。怖かったんだろう。結婚がなくなっても困るからね。そんな時、君と一緒に住もうと言ってくれた。嬉しかったよ。おかげで、喧嘩をしなからも、楽しい思いをさせてもらった。私は世の中の人間の中で、恵まれていた。幸せだった。だから、感謝しているんだ」

その言葉尻は、父の嘔吐する音でかき消されてしまった。父には、初めから聞こえるはずもないのだ。それでも、千春はこのセリフを今の時代の父親に聞かせたかった。どんなにか喜ぶだろう。しかし、祖父はきつとこの時代の、この瞬間の父に言いたかったのだろう、と感じた。両親の人生は、祖父母に支えられていると思っていた。しかし、祖父の人生も、また家族に寄って支えられていたのだ。こうして失敗するときもある。しかし、だからと言ってそこで終わらせるわけではないのだ。善し悪しがあって当たり前なのだ。人間は完璧ではいられない。大事なのは、相手がどれだけ大切かということなのか。千春の悪いところだって、両親や祖父母は認めてくれているのだ。傷つけられることも、傷つけてしまうこともある。それ

を、受け止めて家族は始まるのかもしれない。父はしばらく戻れそうになかったので、千春達は千恵子のドレス姿を見るために父を残し会場に戻った。千春は、母があんなに幸せそうな顔をしているのを初めてみたと思った。確かに、家では笑うことだつて多くある。それでも本当に嬉しそうだつた。娘から見ても、それは女の顔であり、少し切なくなつた。祖父が隣で目を拭う。千春は自然と祖父に手を伸ばした。そつとその手を握ると、それは祖父の手だつた。暖かい、大きな手だ。

二人が式場を出る時、千春はよろめきながらも必死に席に戻ろうとする父の姿を見つけた。もう呆れることはなく、それは笑いに変わっていた。式場の前には、真つ青な海が広がっていた。しっかりと手を握つたまま、千春は海に向かって言う。海の水には太陽の光が反射してガラスをちりばめたように綺麗だ。このまま、祖父と海を越えてどこかへ行つてしまいたい。そんな思いに駆られる。

「あたしも早く結婚したいなあ……。ね!? おじいちゃん! その珠、未来には使えないのかな?」

「そうだなあ。使えたらいいな」

祖父は困つたように、千春の目を見つめ返してきた。

「やってみようよ!」

「千春は、何が見たいんだ?」

その問いに、千春は両手で祖父の手を握り締めて言った。

「あたしの結婚式」

海風が、二人の間を裂くように勢いよく吹き抜けた。まるで、目に見えない神様に拒絶されたようだ。それでも千春も諦めない。

「おじいちゃんにも見てほしいの」

祖父は、ゆっくりと手を離すと、海に向かって歩き千春に背中を向けた。

「無理だよ。千春。それは、無理なんだ」

風よりも冷たく千春の心が吹き荒れる。そんなこと、分かっている。たとえ無理だと思つても、やってみたら出来るかもしれないで

はないか。少しでもその可能性を試してみたかった。両親と同じように、大切に育ててくれた祖父に花嫁姿を見てほしかった。もうそれが叶わない夢になってしまっなんて……。二人は、同じように海に向かって静かに涙を流した。

12 ベランダ事件

しばらくして、二人はお互いの目が赤いことに気づかない振りをしながら、巾着から珠を取り出した。もう光はほとんど薄れている。別れは近いのだ。千春の心には、次第に焦りが沸いてきた。祖父の手に乗せた掌がじつとりと汗ばむ。

「また戻るとするか」

その一言で、千春はまた実家へ戻るのだと悟った。もう実家だからつまらないなどと文句を言う余裕はない。白い靄で、目の前の海が見えなくなっていくのが切なかった。靄が晴れると、何度目になるだろう。同じ場所に立っている。実家は、前回訪れた時とは違っていた。畑が消え、そこは月極の駐車場に建て直されている。これが現在の実家であり千春にとって違和感ないはずなのに、却って何か違う気がした。呆然とその景色を眺めていると、千春の前に駐車場から女の子が飛び出してきた。腕や足のあちこちに絆創膏が貼つてある。右腕には、一カ所包帯がグルグルと巻いてある。それでも女の子はまるで気にせず、走り回っている。その姿も、見たことがあった。

「おじいちゃん……あれ……」

「お、気がついたか。おてんば娘がなあ。あれには寿命が縮んだよ」祖父はそう言って笑ったが、千春は恥ずかしくなった。それが記憶になればないほど、恥を押しつけられたようで肩身が狭い。周りの人間から話を聞いているから、分かっただけだ。そう、正明にも話した。今は、千春がベランダから落ちた直後に来ているのだ。「ちよつと用事があるんだ。千春は、家の周りだけなら動いていなさい」

一緒に行こうとした千春を片手で制すと、祖父は一人家に入ってしまった。仕方なく駐車場へ行くと、コンクリートの地面には、いびつな形の平仮名や絵がそこら中に書かれていた。

「本当におてんばだ」

過去の自分を自嘲すると、千春も玄関の方へと歩いた。門を入ったところで、小さい千春が植木に隠れて玄関の様子を伺っている。その視線の先には、この時代の祖父が水道で手を洗っている。見た目はほとんど今と同じ顔だ。ただ、足腰はしっかりしていて腰がしやんと伸びている。ベランダで落ちた時に怒った祖父が怖くて仲直り出来ていないのだ。

「千春！ 時間ですよ！」

遠くから祖母の声が聞こえる。隠れていた小さい千春は、一瞬身体を強張らせた後、裏口への方へ走っていく。明らかに祖父を避けた遠回りだ。そんな自分に笑いを堪えながら、玄関へと向う。突然、祖母がひよいと千春の目の前に現れた。驚いて小さく叫んでから、口をつぐむ。祖母の顔の見た目も、祖父と同じようにほとんど現在のままだった。祖父に駆け寄り、使用中の水道の蛇口を勝手に捻ると怒りの形相を近づける。

「おじいさん！ 千春が隠れてばかりいるのは、あなたのせいですからね。あんなに怒らなくてもよかったのに。あなたは昔から度が過ぎるんです」

祖母がぶつぶつ不平を言い始めたが、祖父は聞く耳を持たない。唸り声を漏らすと、祖母の手を払って蛇口を捻る。しかし、その手元は洗っているようでただ水が流れているだけだった。

「早く仲直りしてくださいよ」

そう言い残して立ち去る祖母。その姿が見えなくなると、祖父は水を止めた。玄関に入る祖父を千春が追うと、二人の輝雄が立ち往生していた。昔の祖父が不服そうな顔をしている。どうやら小さい千春が来るのを待っているようだ。玄関脇にある棚から小さなキャラクターの描かれた缶を取り出した。そして、その中から一つの小袋を取り出したのだ。そう、それは千春が幼稚園バスに乗り込む前に、祖父がそつと手渡してくれた飴玉だ。あんなところにあったのか……と、千春は宝の場所を見つけた気分だった。いつ頃からか、

あの棚は家から消えてしまった。三人の待つ玄関へ、着替を終えた小さな千春が、下を向いて歩いてきた。幼稚園の靴はここにある。どうしても、突破しなければならぬ。意図的に祖父を見ないのが分かる。片足を靴につっこむと、短い手で一生懸命履こうとする。謝ろうと時間を稼いでいるのだ。しかし、その言葉が少女から出ることはない。

「千春、早くしなさい。おじいちゃんが連れて行ってあげるから」
祖父の声が降る。

「うんっ」

小さな千春は、一瞬の戸惑いを見せた後、輝く瞳で輝雄を見上げた。足をぶらぶらさせながら、座ったまま喜ぶ。そして、手を繋いで玄関を出た二人を、玄関の奥から祖母が見ていることに気づく。千春達は、すぐに幼稚園バスが到着する音を聞いた。

「おじいちゃん、ベランダで遊んでごめんね」

祖母もいなくなり、他の二人も消えた後、千春が飴の隠されていた棚を見つめて言った。今頃、バスに乗った千春は飴を握りしめ、祖父との仲直りにほっとしているだろう。

「どうしたんだ。思い出しちゃったのかい？」

祖父は、千春の頭を撫でようと手を伸ばして言った。しかし、その手は目的地に着く前に下ろされてしまった。いつの間にか、祖父の身長より千春の方が高くなってしまった。

「あたし、自分が悪いことを分かっていたよ。でも、あんなにおじいちゃんに怒られたことがなくて、どう謝ればいいのか分からなかったの……」

「いいんだよ……。私もきちんと言葉で教えれば良かった。だが、それが大事なものであればあるほど、感情が言うことをいかなくてね。それで、いつも傷つけてしまっただ。おじいちゃんも悪かったんだ」

ふっとその場の空気が和らいだ。二十年近くの時を越えて本当に理解し合えたようだった。飴よりも強力な謝罪という言葉の魔法で。

そんな二人の間を、祖母が籠に山盛りの洗濯物を入れ、肩をいからせながら通り過ぎた。まるで、私は謝ってもらっていませんよ、と主張するように。思わず千春が吹き出してしまう。

千春には、分かった気がした。確かに、祖父が祖母のあばらを折ったのはショックな出来事であった。しかし、過ちは犯してしまふものなのだ。祖父は、祖父だった。千春は、自分の心に話した。自分は見えてきたではないかと。この祖父が見せてくれた、何個もの世界の中で、いつも家族と一緒にだった。愛情で溢れていたではないかと。誰もが完璧に人に接しているわけではない。その失敗の中で学べればいいのだ。そして、謝れることも出来る。それが許される限り……、許せるのが、そして続いていくのが夫婦であり、家族であるのだと。

「おじいちゃん」

これだけは、千春も言いたかった。批判ではなく、この仕事を通して学んだ意見として。

「今の時代のおばあちゃんにも、謝れるといいね」

祖父は、ただゆっくりと頷いた。

13 お正月

千春は、祖父が残りの珠をどうするのかとても気になった。珠の行く先、そしてあの夫婦のこと。あと、祖父の心に残るところはどこなのだろうか。

「最後だな」

祖父が、呟く。千春は、首を傾げてその言葉の意味を問いかけた。すると、祖父は顔の間で両手を動かし、鐘を突く仕草を言った。「除夜の鐘だよ」

そうして、巾着から珠と取り出す。そうだった。もう半年後の正月を待つ事は出来ないのだ。今まで一緒に過ごしてきた何度もの元日が思い起こされる。そして来年の、祖父のいない正月を想像する。無言で手を重ね合わせる。白い靄が晴れると、千春は再度我が家を見た。今度は何年に移動してきたのだろう。遠くで除夜の鐘が鳴り響いている。毎年この鐘が聞こえると、うどんを食べるのが実家の習慣だった。そばよりもうどんを好む家族は、祖父の号令の元食事をする。唯一うどんを嫌いだと主張する祖母も、結局は一番食べる。それを千春と祖父がよくからかった。……そんなことさえ、もう出来ない。

「あけましておめでとう」

祖父が、楽しそうに言った。千春も本当に年を越えたように感じた。

「おじいちゃん、おめでとう。いつまでもよろしくね……」

叶わない夢だったが、そう願わずにいらなかった。暗闇の中、千春は頬を伝う涙を、祖父からは見えないように素早く拭いた。

二人が家に入ると、小学生ほどに成長した千春が着物を着ていた。うどんを食べた後、家族で近くの神社にお参りに行くためだ。うどんを食べ終えると、それぞれがテレビを見たり、着替えたりして過ごす。鐘が鳴りやんだ頃には、誰ともなく皆が和室に集まるのだ。

そして仏壇の前に座り、ご先祖様にお線香をあげる。お正月の仏壇は豪華だ。果物やおせち、貰ったお菓子が並ぶ。家族が交代でお線香をあげ終わると、全員で騒ぎながらも玄関を出ていった。

静まり返る家の中で、千春と祖父も仏壇の前に座った。

「お世話になりました」

祖父が写真に話しかける脇で、千春も目を瞑った。曾祖父母の写真が飾られている。今も千春の実家にあるものだ。祖父は、なおも続ける。

「養子に來た頃、私はあなた達が嫌いでした。存在も重かった。態度に腹が立った。……しかし、千恵子が生まれ、今は分かります。あなた達がいつも守ってくれました。手助けしてくれました。いつの間にか頼りにしていました。生きている間にお礼を言えず、申し訳ありませんでした」

千春がうつすらと目を開けると、隣に正座している祖父も目を閉じていた。

「私も、もうそちらに行くことになりました。この時代でお願いするのはおかしい話ですが……。文子を、千恵子達をお守り下さい。私の……、そしてあなた達の家族をどうかいつまでも……」

最後の方は呟く声も小さく、千春にはよく聞こえなかった。しかし、祈る姿は凛々しく見えた。背筋を伸ばし、顎を引いて。この家に、祖父が初めて来た日、この和室に座った姿と同じだった。家族が灯した火が、線香を根本まで燃やしていく。全てが灰となった頃、祖父が言った。

「千春、お年玉をあげよう」

線香ばかりを見ていた千春が祖父の方を向くと、彼はすでに目を開けていた。

「何……？ いいよ。あたしも働いているんだよ？」

「いや、たいしたものじゃない」

お金など、今持っているはずがない。千春の視線は、祖父が手を突っ込んだポケットに注がれる。お金以外ならなんだ。珠しかない

のだ。珠をくれると言っても言うのか。

「ほら、手を出しなさい」

そう言われて手を差し出すと、祖父から小袋が一つ渡された。

「おじいちゃん……。これ、どうしたの……？」

千春は掌に乗ったそれに驚いた。そこには、あるはずのないミルク味の飴玉があったのだ。千春の大好きな、もう発売されていない飴。祖父に怒られたあの時、なかなか謝れなかった千春が貰ったあの飴だったのだ。お金とは比べ物にならない。懐かしさに心が揺れ、その手が震える。

「いや、さつきな。せつかく移動したので失敬した。たくさんあるんだ、気づきはしないだろうよ」

何かを企んだように含み笑いをすると、祖父は千春のその手を両手で包み込んだ。

「さつきつて……あつ！」

そうなのだ。前回の移動で、祖父は用事があると言って一人どこかに消えてしまった。玄関付近にいたではないか。もしかして、祖父はこのためにあの時代に行ったのだろうか。全ては祖父のシナリオ通りになったということか……

「美味いぞ。ちょうどいいからお参りもするか」

お寺から除夜の鐘はもう聞こえない。飴を食べてしまうのは勿体なかった。あの時のように、千春は飴玉をポケットにしまうと笑って頷いた。お寺は人で溢れている。住宅街の中にあるここは、毎年必然的に混んでしまう。千春も出来るならばお賽銭をあげたかった。お参りしなかった。しかし、時間がないのも分かっていた。着いて数分もすると、祖父は巾着を取り出した。

「さて、急ごう」

祖父のその声は、今まで以上に焦りを帯びていた。千春が見ると、屋台の明かりや街灯に反射するように珠は光を放っていた。しかし、その光は弱い。もう終わるのだ。祖父の人生も、そしてこの旅も……。二人は珠を挟み、頷き合って手を繋いだ。

14 精一杯の嘘

「千春。目を開けなさい」

今までの旅を思い出して目を瞑っていた千春が、祖父に言われて目を開けると霽はすでに消えていた。

「最後の珠だ。これからおじいちゃんの嘘を教えよう。もう知っているかもしれない。おじいちゃんもここまで考えていなかったんだ。許してほしい」

最後の場所は、また実家だった。とても愛しく思える場所だ。昼下がりの太陽の光を浴びながら、門の中で家族が記念撮影をしている。その真ん中で、千春が着物姿でピースサインを出している。もうこれは数年前に過ぎない。祖父の嘘……。

「あ、あたしの成人式の時……」

祖父は、千春を見て頷いた。全員で写真を撮った千春が、父親にカメラを手渡した。そして、祖父の手に自分のを絡める。少しの戸惑いも迷いもない行動。仲のいい家族の形に間違いはない。

「手……」

千春は思い出した。病院で、寝ている祖父の手に触れた時、本当に久しぶりだった。最後にいつ手を繋いだのか思い出せなかった。二年近くも前だったのだ。それに気づいた途端、激しい後悔に襲われる。こみ上げてくる涙に、喉が狭くなる。苦しくなって口を開くとうめき声が漏れた。日々の忙しい生活に終われ、大事な物を忘れていた。涙が、あとから、あとから溢れてくる。両手で何度拭っても止まらなかった。涙で、はしゃいでいる自分の姿が見えなくなる。「おじいちゃん……ごめんなさい……」

「何を泣いている。いいんだ。いいんだよ。皆毎日忙しかった。よくして貰った。寂しいなんて、年寄りの我が儘だったんだ。おいで」泣いている千春に話しかけると、祖父はゆっくりと手を引いた。家の中に上がる。玄関のすぐ脇にある祖父の部屋に入った。

「ここに来るのも、最後か……」

部屋の中を見回しながら、祖父は絨毯の上に座った。

「おじいちゃん、ここでやつを食べることが好きだった……」

「そうだな。二人で食べ過ぎては、夕飯を食べられなくて怒られたなあ」

「だって、おじいちゃんがどんどんおせんべいを出すんだもん」

「千春が、お茶をがぶがぶ注ぐからだ」

こんな光景は以前のままだ。それなのに、もう二度と訪れることはない。祖父の笑い声と、千春の鼻水を啜る音だけが虚しく響いた。「さて、秘密を教えよう」

一通り笑うと、祖父が言った。千春はもう充分だった。祖父のこともたくさん知ることが出来た。きつと忘れない。

「もういいよ。おじいちゃんが、それをしたかった。秘密にしたかった。それならそれでいいんだよ」

良いことだろうと悪いことだろうと、祖父は祖父だ。それでいいのだ。

「なあんも分かつとらん。千春。死ぬ者は言い、生きる者は知る必要がある。最後までだ。今まで色んなものを見てくれた。これもそのひとつだ」

こたつの上に、白い紙の小袋が置かれていた。それには千春も見覚えがあった。祖父がいつも飲んでいる薬だ。心臓が悪い祖父が一日三回飲み続けている薬。が、袋に書いてある病院名は異なる物だった。大木眼科医院……

「おじいちゃん？ …… どういうこと？ 心臓が悪いんじゃないの？」

千春は昨夜病院で、祖父が薬を飲んでいなかったらしいと、母から聞いていた。祖父は心臓の薬を飲んでいなかったのだ。しかし、薬を飲んでいるのは確かだった。こういうことか……。祖父は何年も、家族を騙していたのか……。なぜだ。

「そうだ。これが私の最後の、そして最大の嘘だ」

祖父は、千春の目から視線を逸らすことはなかった。真っ直ぐ訴えるように千春を見て、話し続ける。

「おじいちゃんはな、寂しかったんだよ。家ではおばあちゃんもいる。ご飯も美味い。老

人会もそれなりに楽しかった。……どうしてだろうな。でもな、家族は毎日出掛けてしま

う。話しをする暇もない」

「……」

それは当たり前であり、仕方のないことだ。生活を維持するために働く。誰しもがそうしている。それに祖父母のことも、誰もが常に心配していた。それなのに、寂しかったのか……。なんのために一緒に住んでいたのだ。なぜ家を出たのだ。千春の胸に、再び後悔の波が押し寄せる。……なぜもつと早く教えてくれなかった……。

「寂しさを紛らわすためにおばあちゃんと話すと、耳が遠くてお互い苛々するしな」

そう言いながら、にやつと笑う。千春は何も言えなかった。

「だから嘘をついた。胸が苦しいと。最初はそれだけだった。しかし、誰も病院に行こうとは言わなかった。行けば？ だったんだよ」

「おじいちゃん……」

「決して責めているのではない。私の我が儘だよ。だから病院に行つたと言った。心配して欲しかっただけなんだ……」

「……」

「だから、その時は耳鼻科へ行つて薬を買った。歳をとれば、具合が悪い所はいくつでもある。簡単だ。だが、それさえ誰も関心を持たなかった。何の薬を飲んでいるのか、袋を見ようとしなかった」

千春もその一人だった。祖父は一人で病院へ行き、きちんと薬を飲んでいたので大丈夫だと高を括っていた。

「毎回違う病院に行くのは大変だったよ。だから、飲む振りもしたんだぞ。それでも、誰も私が薬をちゃんと飲んでるか、聞きもしなかった」

「おばあちゃんはこの事を……」

「知っているさ。馬鹿だからやめろと言われたが、私は賭けたかったんだ。いや、望んだんだ。誰かが気づくのを……」

「誰か……気づいた？」

千春は家族の顔を順番に思い浮かべた。誰かが気づいていれば、昨夜その話をしたに違いない。いや、もっと早くに解決出来たことだ。

その時、玄関から声が聞こえた。写真撮影を終えたのだ。この後、全員で料亭に食事に行くはずだ。一つの足音が部屋に近付いて来たと思ったら、ドアが開いて祖父が入ってきた。歩くスピードも落ちている。腰も曲がっているではないか。二人が座っていることも知らない彼は、こたつの上の袋に手を伸ばすと、背広の上着の胸ポケットにしまった。その顔はせつなげだった。彼が部屋を出て行くと、祖父が言った。

「気付いてくれたさ。一人だけな。葉子さんだ」

「え……」

葉子は、兄の嫁だ。千春が就職すると同時に実家にやって来た。一緒に暮らし始めてまだ半年くらいしか経っていない。千春は、何年も自分達が気づかなかったことに、葉子が

気付いたということがショックだった。兄嫁より自分の方が祖父を愛している、心配して

いる。そう思った。でも、違ったのか。

「葉子さんは、一緒に病院へ行こうとすぐに言ってくれた。おかしな話したが、あんなに望んでいたのに、いざ言われると焦ってしまった。そして、全て話したよ」

「葉子さんは……、なんて？」

「何も言わなかった。ただ頷いていた。それから、その話には一切触れてこなかった」

「そっか……」

千春は兄嫁の顔を思い出した。背と声が高く、気が強そうな女だった。千春が実家を出る決意をしたのも、兄嫁が原因のひとつだ。それなのに……。

「いい子だ。いい嫁だ。お兄ちゃんにはもつたいないなあ。そういえば、葉子さんはお前をいつも心配していた。一人暮らしは危ないと。実家に戻ってほしいと言っていたぞ」

千春は、葉子とほとんど話したことがない。避けていたのだ。嫌な女だと決め付けていた。しかし、違ったみたいだ。

「そうだね……」

千春の中で何かが吹っ切れた気がした。自分のこだわっていたことが、いかに小さかったかを見せつけられたようだ。兄が嫁を貰い、家に居場所が無くなったような気分だった。会社で大した仕事も任されず必要とされていない気がした。どこかで自分の価値を求め続け、存在を否定しかけていた。しかし、祖父が祖父であるのと同じく、千春も千春なのだ。自分の価値は自分で決めよう。今まで歩いてきた道は確かに存在する。大事な人間を大切にしよう。素直にそう思えた。祖父が巾着を開ける。千春も一緒に覗き込む。中にひしめき合っている珠は、もう全て透明になっていた。

「終わったな。千春」

「終わったんだね……」

祖父は珠に満足できたのだろうか。また、人生に満足しているのだろうか。思い出は、ほとんど家族、家だった。初恋の人に会わなくていいのだろうか。友達に会いたくはないのか。聞きたいことは山ほどあった。しかし、祖父はなんとやり切った顔をしているのだろう。これから死に逝く人と思えないほど、瞳はキラキラ輝いている。肌も綺麗だし、顔色もいい。それが、全ての答えだと思えた。

「おじいちゃん、幸せ？」

「あー幸せだ。千春みたいな泣き虫の孫がいて、耳の遠いおばあちやんと、料理上手な千恵子もみんながいて幸せだった」

そう答える祖父は、とても穏やかだった。

「ありがとうな。じゃあ、最後にもうひとつだけ付き合っておくれ」
巾着の珠はもうない。時間移動はもう出来ないのだ。あとは帰るだけだ。千春は、祖父と珠に遮られることなく手を握り合った。

15 リレー

移動した先は、病院だった。しかし、そこは見慣れた外観の祖父が入院している病院ではない。通常の時間に戻ると、もう正午を過ぎていた。祖父が逝くまであとわずかだ。昼間の病院は、外来の患者で溢れている。そのロビーを抜けて、静かな入院病棟へと足を踏み入れた時だ。目の前に現れたのは同じ仲間だった。

「やっぱり来てくれたんですね」

北海道旅行へ移動した際に会った、付添人の婦人だった。千春達に気づくと、不安そうな顔で近付いてきた。祖父が、全てを見通していたように頷いて言った。

「ご主人は？」

「数時間前に。今は病室で私といいます」

主人が亡くなったのに、婦人はまだ身体に戻っていないのか。千春の持った違和感は、すぐに確信に変わった。彼女はもう元気ではないのだ。祖父と同じ状態にあるということか。すでに死に近付く理由として、肉体と共にいないのだ。

「奥さん！　なんてことを……」

彼女の決心は、変わらなかったのだ。千春は責めるつもりはなかった。ただ、どうしてもという思いが募る。そんな千春に、婦人は笑って言ったのだ。

「睡眠薬。一瓶飲みました」

「ええ？　でも今ならまだ助かるかもしれません！」

千春がそう叫び、慌てて部屋を探そうとした。しかし、それよりも大きな声で婦人も叫んだのだ。

「待つて！　いいんです。こうしたいんです」

夫人は静かに言った。姿の見えない三人の脇を、昼食のカートを押す看護婦が通り過ぎた。千春は、その看護婦に早く婦人を発見してくれるよう祈りかけた。

「ご主人には話しましたか？」

焦る千春とは対照的に、祖父の声は落ち着いていた。そして胸から巾着を取り出す。

「話しました。すぐに怒られました。……でも、最後にあの人笑ってくれたんです。そんなに想って貰えて幸せだつて。悲しいけど、嬉しいつて。待っているつて。……言ってくれたんです」

涙まじりの声に、千春も何も言えなかった。あの幸せそうな夫婦の姿を見てしまっているのだから。三人の間の沈黙を破ったのは、やはり祖父だった。

「そうですか。私は考えたんです。もし……、私の妻があなたと同じことを言ったらと。恐らく、いや絶対に私は怒るでしょう。自分は死にたくて死ぬわけではない。なのに、お前がなぜ命を粗末にするか、と」

「主人も同じことを言いました。生きろと……」

「そうですね。しかし、私だつてそれでも妻と一緒に逝くと言ったら認めるかもしれません。いや、喜ぶかもしれません。私は、それが恐かったのですよ。だから、孫を連れてきたんです。確かにこの子に全てを見せたかった。ただ、それだけでもなかった。この子は絶対に一緒に死ぬなんて言わないですから」

そう言つて、祖父は声をたてて笑った。

「昔から、私は弱虫なんですよ。とくに妻に対してはね」
目尻を拭いながら、婦人も頷いた。

「いえ、わかります。反対の立場なら私も同じこと言うと思いますから……」

「そうですね。そうかもしれませんがね。でも、それでもあなたがこれを使いたいというならばあげましょう。大切に、そして有意義な時間を使つて下さい」

祖父が夫人に巾着を手渡すと、夫人の体が金色に光り始めた。そして、心臓の辺りから一本の線となつて飛び出した光が、珠の中に順番に吸い込まれていく。あれは時間であり、記憶だ。そして、感

情なのだ。線が消えると同時に、珠は全てが金色に変わっていた。巾着の外まで溢れてくる。彼女はこれから、旅に出るのだ。

「時間もなしでしょうに、本当にありがとうございました」

夫人は、二人に向かって頭を下げた。千春も釣られて頭を下げる。「いいんです。私も誰かに渡さなくてはなりません。危うく妻に渡すところでした」

祖父は、そう言つて胸の前で軽く手を振り、笑つて言つた。

「使い方は大丈夫ですね？」

「はい。今から付添人のところへ行きます」

夫人はお礼を言つた。何度も振り返り、そして見えなくなつた。

「よかったね、おじいちゃん」

「ああ。そうだな」

二人の前には、ただ静かな廊下が続く。車椅子で移動する者、誰かに支えて貰い歩いている者、みんな生きている。死に怯えている者もいるだろう。それでも、この珠がリレーを続ける限り、人は救われる気がした。

「でも……。ねえ、おじいちゃん。付添人におばあちゃんを連れていけない理由、本当？」

「半分本当、半分嘘だな。付いていくつて言われるのも怖いのは確かだ。しかし、きつと言われないのも怖いんだ」

「そっか……。でも、おばあちゃんなら言つたと思うな。もし言わなくても、きつと強がりだと思う」

「そうかなあ……」

「あれ？もしかして心配？あ、心配なんだ？」

千春は、ふざけて笑いながら祖父の顔を覗き込んだ。これで大丈夫、漠然とそう思えた。急いで戻らなければ、祖父が危なくなってしまう。二人はとうとう、祖父の病院へ戻ることにした。

唐突な目覚めだった。まるで眠っていないなかったような。昨夜、正明と話しながら、瞬きをしただけのような一瞬だった。千春が目を開けると、そこは病院のベッドだった。ただ、正明と横になった祖父の病室ではない。カーテンからは日の光が差し込んでいるが、それは朝日ではなかった。起きあがろうとして右手が引っ張られる。痛みを感じて腕を見ると、点滴がされていた。千春は一番近くの記憶を呼び覚まそうとぎゅっと目を閉じて考えた。確かに祖父と手を繋いだ。……思い出した。手を繋いだ瞬間、千春の体は引き裂かれるような痛みに襲われた。力が入らなくなり意識が朦朧としたのだと思い出した。靄はなかった。……昨夜のことは夢だろうか。

一瞬そんな考えが脳裏に浮かび、すぐに否定する。そんな訳がないのだ。あんなにもリアルで、確かな手触り。匂いを感じて、痛みを帯びた。喜びに笑い、後悔に泣いた。左手で目元に触れると、しつとりと涙の跡が残っている。千春は、慌ててナースコールのボタンを何回も押した。それでも看護師が来る気配がない。歯を食いしばり、刺さっている針を一気に引き抜いた。一瞬痛みに声を上げたがどうでもよかった。血が出たが拭くこともしない。心臓が破裂しそうに脈打つ。昨夜のことが嘘でも困る。しかし、本当でも困るのだ。もし事実ならば祖父は……。スリッパを履いて病室を出ると、廊下に正明がうずくまっている。祖父の病室の隣だったのだ。

「まあくん！」

思わず大声で呼んで駆け寄ると、正明は真っ青な顔を上げた。

「ちよっと！ あたしはどうして寝ていたの！ 起こしてよ！」

千春が正明の両肩を揺さぶるも、彼は目線だけを祖父の病室へと向けた。何も言わなか

った。しかし、その目が物語る。

「まさか……」

正明から手を離すと、今度は病室の扉を思い切り開けた。横にスライドする。勢い余つ

た扉は、一度端に当たった後に跳ね返る。その音で、病室の人間が振り向いた。

「ちよつと、千春！ 大丈夫なの？」

母の千恵子が千春に駆け寄ってきた。エプロンをつけたままの姿だ。それがいかに急な

出来事だったかを表していた。

「あたし……」

「あらやだ！ 腕から血が出ているじゃない。点滴終わったんじゃないの？」

千春が部屋を見回すと、家族全員がいた。祖母も、父も兄も兄嫁も……。正明は氣を使

ったのだろつ。恐らく、彼もこんな急展開に出くわすとは思わなかったはずだ。

「千春……。あなたが目覚めないって正明くんに電話を貰って驚いたわよ。先生が点滴で

大丈夫だつて言うから寝かせていたの」

千春は、自分が寝ていた理由など耳に入らなかった。そんなこと自分が一番知っている。千春は、旅に出ていたのだから……。

「おじいちゃん……」

つい数分前まで手を繋いでいた。冗談を言い、一緒に旅をしていたはずなのに。今、祖父は酸素マスクが当てられ、心電図も微弱になっていた。よろめく足で千春がベッドに近寄ると、祖母が手を握っていた。気丈にもその顔に涙はない。

「おじーちゃ……」

祖母はやはり強がりだ。千春は、最後まで泣き虫だった。寝ている祖父を見るだけで涙が溢れる。充分だと思つたはずなのに、また後悔がうち寄せる。最後にもっとたくさん言葉をもっとかけてあげれば良かったと思つた。その時、祖父がうつすらと目を開けたのだ。

見えているのか分からないほど微妙でうつろな目だ。

「朝からこんな感じの繰り返しだ」

そう父に告げられ、千春は祖父に顔を近付けた。

「千春……」

祖父が小さな声を漏らす。そのせいで、マスクの中が曇る。

「おじいちゃん！　ありがとう！　おじいちゃん！」

千春は、必死で祖父の顔へ呼びかけた。何度も何度も。聞こえないかもしれない。周りにはよく分からないかもしれない。でも今、全身で伝えたかった。過去を見せてくれてありがとう。幸せに育ててくれてありがとう。おじいちゃんの孫に産んでくれてありがとう。全てを伝えたかった。祖父は、そのまま少しだけ首を縦に動かした。マスクの中が曇る。だが、何を言っているのかは聞き取れなかった。そして、祖父は死んだ。病室には、ただ無情に人の死を告げる高い機械音だけが響いていた。

「午後二時五分、ご臨終です」

今までいたのかわからないくらい部屋の隅にいた医者が一言発し、悲しみが静かに皆を包んだ。

おじいちゃんへ

あつという間の出来事で、まだなかなか気持ちの整理はつきません。時々、おじいちゃんは今でも私達と暮らしているような気がしています。でも、私はおじいちゃんの死を看取ってから一度も泣いてはいません。確かにおじいちゃんがなくなったことはとっても悲しいです。でも、私にはおじいちゃんと過去へ行った時間があるから寂しくはありません。見たくないことも、知りたくないこともありました。でも、今はあれらが必要なことだったと思います。おじいちゃんの人生は素敵だった。幸せな家族をありがとう。

私は先月実家に戻りました。両親はもちろん、葉子さんとも仲良

くやっています。私はあなたが生きたという証人です。死の付添人の仕事は、その人の生き様を見届け、心に刻むことだと分かった気がします。私は絶対にあなたの一生を忘れません。

そういえば、お母さんが不思議がっています。おじいちゃんは薄れゆく意識の中、おばあちゃんに何度も謝ったそうですね。おばあちゃんは、お母さんがいくら聞いても笑っているそうです。……きつと分かっているのかな。

まだまだ話したいことはたくさんあります。でも、また来るからその時に聞いてね。おじいちゃん、本当にありがとう。

「ちはる！　いつまで手を合わせているの。早くいらっしやい！」

遠くから、千恵子の声がした。千春は目を開き、返事をしながら祖父のお墓に一礼をした。隣では正明も微笑んでいる。正明を見上げ、ぺろっと舌を出した。

「長すぎたかな？」

そう言うと、千春はポケットから古そうな飴玉を取り出し、口に放り込んだ。甘いミルクの味が口の中いっぱい広がる。懐かしい味だった。

今日は、祖父の四十九日だ。法要を終えた家族は、これから昼食会に出なければならぬ。飴の袋を見ると、正明は顔をしかめていった。

「なんだそれ？　古い絵だな、食べて大丈夫かよ」

「最近貰ったからいいのっ！」

大事にポケットに戻すと、舌の上で飴を転がす。千春は、祖父と過去へ飛んだことは誰にも話さなかった。夢だと思っている訳でもない。信じて貰えないからでもない。このことは、祖父との最後の秘密にしたかったのだ。その思い出を胸に、これからも強く生きていくのだ。そう、いつかまた付添人にご縁があるまで……。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3466o/>

付添人

2010年11月1日12時55分発行